ノ規定ヲ適用ス

〔解義〕〔理由〕

本兩條ハ訴訟告知ノ手續ニ付示定セリ

第六十條

訴訟告知ハ訴訟ヲ告知ス可キ理由及ヒ訴訟ノ現況ヲ記載シタル書面ヲ裁判所ニ提出シテ之ヲ爲シ而シテ該書面ハ第三者即チ被告知人ニ送達スルヲ要ス

書面ニ訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ現況ヲ記スル所以ノモノハ第三者ヲシテ訴訟ニ參加スル必要ヲ知ラシメ且己ノ意見ヲ陳述スルヲ容易ナラシムルモノナリ

第三者ハ告知ヲ受クルモ之ニ參加スルト否トハ自己ノ自由ナリ然レ𪜈若シ告知ヲ受クルノ理由アル片ハ告知人トノ關係ニ付キ裁判ノ効果ヲ生スルモノトス

又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ對手人ニハ第三者ニ送達シタル書面ノ謄本ヲ送付セサル可ラス對手人ハ第三者ニ告知スルノ理由ナク隨テ參加セシム可ラスト思考スル片ハ之ヲ抗辨スルコトヲ得ヘシ

第六十一條

訴訟ハ訴訟ヲ告知スルニ拘ラス之ヲ續行スルモノトス何トナレハ告知ノ爲メ訴訟ヲ中止スル片ハ對手人ヲシテ謂ハレナク延滯ノ不利ヲ被ラシムレハナリ然レ𪜈第三者カ參加ヲ拒ムカ若クハ定時期内ニ返答ヲ爲サヽルヿノ定マルマテハ裁判ヲ下ス可ラサルモノトス

第三者カ參加スルコトヲ陳述スル片ハ即チ從參加人トナル

ヲ以テ其手續方法ニ至テモ悉ク從參加ノ規則ヲ適用ス可キナリ

〔參照〕

獨　第七十條訴訟通知ハ書面ヲ送達シテ之ヲナスモノトス其書面ニハ訴訟通知ノ理由及訴訟ノ現狀ヲ記載スヘシ

書面ノ謄本ハ之ヲ對手ニ交付スヘキモノトス

同　第七十一條　他人訴訟通知者ニ附隨スルトキ其原被告トノ關係ハ副立入ノ原則ニ依テ定マルモノトス

他人附隨ヲ拒絶シ又ハ返答セサルトキ訴訟ハ他人ニ關セス之ヲ繼續スルモノトス

總テ本條ノ場合ニ於テハ他人ニ對シ第六十五條ノ規定ヲ適用スルモノトス但訴訟通知ニ依リ附隨ノ時ニ代ルモノハ附隨スルコトヲ得シ時ナリトス

第六十二條　第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物ノ占有者トシテ被告ト爲リタルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ指名シ之ニ陳述ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムルトキハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ爭フトキ又ハ陳述ヲ爲サルトキハ被告ハ原告ノ申立ニ應スルコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受クルコトヲ得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被告

ノ申立ニ因リ其被告ヲ訴訟ヨリ脫退セシム可シ」其物ニ付テノ裁判ハ被告ニ對シテモ効力ヲ有シ且之ヲ執行スルコトヲ得

〔解義〕〔理由〕〔的例〕

本條ハ本人指示參加ノ事ニ付示定セリ

他人ノ名義ヲ以テ物件ヲ保有(占有)スル者其物件ノ取戻シ又ハ展觀等ニ付請求ヲ受ケタル片ハ物件所有者ニ對シ訴訟ヲ告知スルノ權アリ例ヘハ他人ノ物件ヲ借用シ若クハ受托スル者物件保有ノ点ヲ以テ他人ノ訴訟ニ逢フタル時保有者ハ其物件ニ付保護スルノ義務アラサルカ若クハ之ヲ保護スルヲ欲セサル時ハ物件所有者ニ對シ訴訟ノ幇助ヲ望ムノミナラス尙ホ訴訟上ノ責任及ヒ辨護ノ義務ヲ一切本人ニ全委スルヿヲ得ヘシ而シテ之ヲ爲スノ方法ハ本案ノ辨論前ニ於テセサル可ラス何トナレハ一ノ妨訴抗辨ニ外ナラサレハナリ

又第三者即チ本人ノ誰タルヲ指名シ其呼出ヲ請求スル片ハ本人カ陳述ヲ爲スカ若クハ陳述ヲ爲スタメ與ヘタル期日ノ經過スルマテ本案ノ辨論ヲ拒ムヿヲ得ヘシ

本人カ被告ノ主張ヲ爭フトキ即チ自己ノ所有物ニ非ラス隨テ本訴ニ關係ナキ旨ヲ陳述スルカ又被告ノ告知ニ對シ有無ノ返答ヲ爲サヽル片ハ被告ハ原告ノ求ニ應シ物件ヲ返還スルモ又ハ展示セシムルモ己ノ自由ナリトス後日ニ至リ決シテ本人ニ對シ責任ヲ負フヿ無カル可シ

本人カ被告ノ主張ヲ正當ト認タル片ハ被告ノ承諾ヲ得テ訴訟ヲ引受クルコトヲ得ヘシ而シテ此場合ニ於テ原告ノ承諾

ヲ要セサル所以ノモノハ其物件ニ對シテ爲シタル判決ハ被告ニ對シ有効ニシテ且執行力ヲ生スルヲ以テ(本條末項)毫モ原告ニ利害ナケレハナリ又本人カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ被告ハ裁判所ヘ申立テ其訴訟ヲ脱退スルコトヲ得ヘシ既ニ訴訟ヲ脱退スルトキハ初ヨリ訴訟ニ關セサルト同一ノ効果ヲ生スルモノトス

其物ニ付テノ裁判ニシテ被告ニ對シ執行力ヲ生スル場合ハ之ヲ例ヘハ本人カ訴訟ニ敗訴トナル時原告ハ其物ヲ保有スル借主受托者ニ對シ之カ執行ヲ爲シ得ヘキ時ノ如シ

〔參照〕

獨　第七十三條　何人タリトモ物件ノ現有者トシテ出訴セラレタル者他人ノ名義ヲ以テ其物件ヲ現有スルコトヲ主張スル場合ニ於テ本事件ノ審問前他人ニ其訴訟ヲ通知シ陳述ノ爲メ之ヲ原告ニ指名シテ喚出ストキハ其陳述ヲナスマテ又ハ其指名セラレタル者ノ陳述スヘキ裁判期日ノ終ルマテ本事件ノ審問ヲ拒ムコトヲ得

其指名セラレタル者被告ノ主張ヲ肯ンセス又ハ返答セサルトキ被告ハ訴訟ノ申立ニ應スルノ權アルモノトス

其指名セラレタル者被告ノ主張ヲ正當ナリト承認スルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受ルノ權アルモノトス原告ノ承諾ハ其申立テタル請求被告ニ於テ他人ノ名義ヲ以テ現有スルコトニ關係ナキモノニ限リ必要ナリトス

其指名セラレタル者訴訟ヲ引受ケタルトキ被告ハ其申立

ニ依リ訴訟ヲ免カレシメラルヘキモノトス事件ニ關スル裁決ハ被告ニ對シテモ亦効力ヲ有シ且執行セラルヽコトヲ得

第四節　訴訟代理人及ヒ輔佐人

第六十三條　原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲ササルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス

辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

〔字解〕

辯護士トハ現今ノ代言人ヲ云フモノナリ

〔解義〕

本條ハ訴訟代理人ノ事ニ付示定セリ

原告若クハ被告トナリ訴訟ヲ爲ストキハ自身ニ出廷スルカ若シ自身出廷セサルトキハ辯護士ヲシテ訴訟ヲ代理セシメサル可ラス而シテ又原被告本人自ラ出廷スルモ若シ相當ノ陳述ヲ爲ス能ハサルトキハ裁判所ハ辯護士ヲシテ演述セシム可キヿヲ命シ得ヘシ(本法第百二十七條)

辯護士ノ在ラサル場合即チ管轄裁判所々屬ノ辯護士ナキトキハ訴訟能力ヲ有スル(本法第四十三條乃至第四十七條)親族

若クハ雇人ヲ以テ代理人ト爲スコトヲ得ヘシ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力アル者ヲシテ代理セシムルコトヲ得ヘシ然レ𪜈訴訟代理ヲ常業トセル者所謂潛リ代言人ナルトキハ裁判所ハ之ヲ退斥セシムルコトヲ得ヘシ(本法第百二十七條)

區裁判所ノ訴訟ナルトキハ辨護士ノ在ルトキト雖𪜈訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ代理セシムルコトヲ得ヘシ本條區裁判所ノ訴訟ニハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ代理セシムルコトノ規定ナシト雖𪜈地方裁判所以上ノ訴訟スラ之ヲ許スコトアルヲ以テ考フレハ區裁判所ノ訴訟ニテハ況ンヤノ原則ニ依リ之ヲ許可スルノ律意タル推知スヘキナリ

〔理由〕

地方裁判所以上ノ訴訟ニ本人之ヲ爲スノ外辨護士ヲシテ代理セシム可シト定メタル所以ハ訴訟ハ事實及ヒ法律ノ關係ヲ明示シ訴訟ノ全局ヲ裁判所ニ陳述スルノ能力ヲ具有セサル可ラサルト旁ラ潛リ代言人ノ弊害ヲ防遏スルニ在リ

區裁判所ノ訴訟ニ辨護士ヲ必要トセサル所以ハ區裁判所ノ訴訟ハ概子急速ヲ要シ費ヲ主トスル所ノ輕微事件ナレハナリ

〔參照〕

獨　第七十四條　地方裁判所及其上級ノ諸裁判所ニ於テハ原被告訴訟裁判所ノ附屬代言人ヲ以テ訴訟代人トナシ代理セシムヘキモノトス(代言訴訟)

此規定ハ受命裁判官又ハ受託裁判官ノ裁判手續並ニ裁判

書記ニ付テナスコトヲ得ル訴訟上行爲ニハ之ヲ適用セサルモノトス

訴訟裁判所附屬ノ代言人ハ自己ヲ代理スルコトヲ得

同　第七十五條　代言人ヲ以テ代理セシムルコトヲ要セサル場合ニ限リ原被告ハ訴訟ヲ自己ニナシ又ハ各訴訟能力者ヲ以テ訴訟代人トシテナスコトヲ得

第六十四條　訴訟委任ハ裁判所ノ記錄ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコトヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載セシムルトキハ書面委任ト同一ナリトス

〔解義〕

本條ハ委任ノ程式ニ付示定セリ

訴訟委任ハ書面ニ依テ之ヲ證シ且書面ヲ裁判所ニ提出シテ訴訟記錄ニ編綴セシメサル可ラス

委任書面ニ公正證書ト私署證書ノ別アリ公正證書ハ公證人之ヲ作ルヲ以テ對手人ニ於テ反證ヲ擧示セサル上ハ尤モ大ナル信憑力アリト雖ヒ私署證書ニ至テハ公證人ノ介入ナキヲ以テ對手人ニ於テ之ヲ承認セサル片ハ何等ノ信憑力ナキモノトス是ヲ以テ私署證書ハ對手人ノ求アル片ハ公證人若クハ相當官吏ノ認證ヲ受ケ之ヲ提出セサル可ラス

口頭辨論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ訴訟本人ハ口頭ヲ以テ誰某ニ委任ス可キ旨ヲ述ヘ調書ノ錄取ヲ求ムルコトヲ得可シ此時ハ認證ヲ經タル書面委任ト同一ノ効力アルモノトス

〔參照〕

獨　第七十六條　訴訟代人ハ書面上委任ヲ以テ代理ヲ證明シ其書面ヲ訴訟書類ニ供フヘキモノトス

私製證書ハ對手ノ求メニ依リ裁判所又ハ公證人ノ公證ヲ受クヘキモノトス其公證ヲナスノ際證人ヲ立會ハシメ及筆記ヲ作ルコトヲ要セス

第六十五條　訴訟委任ハ反訴、主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲ス權ヲ授與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非ラサレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ、訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スル權ヲ有セス

第六十六條　訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シ効力ナシ

然レ𪜈辯護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付委任ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕〔理由〕

本條ハ委任ノ權限及ヒ制限ニ付示定セリ

第六十五條

訴訟委任ハ當然左ノ權限ヲ包含スルモノトナス

反訴、主參加、假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲

此他訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ヲ領收スル權

以上ハ訴訟進行中概子發生ス可キ事項及ヒ訴訟結果上自ラ委任セラルヽモノト推定ス可キモノニシテ本人ノ爲メニ不利ナラサル場合ヲ斟酌シ以テ適宜ニ規定セルモノナリ

訴訟ニ關スル總テノ行爲トアリ故ニ訴訟進行中自ラ發生ス可キ事項ニシテ本人カ當然委任セシモノト推定シ得ヘキモノハ悉ク包含スルモノト解釋セサル可ラス

相手方ヨリ辨償スル費用ノ領收ヲ爲ス權トアリ故ニ訴訟費用以外ニ渉リ辨償ヲ受領スルノ權ナシト解釋セサル可ラス

何トナレハ其他ノ辨償ヲ受クルハ爭訟外ノ行爲ナレハナリ

本條第二項ハ訴訟代理人カ特別委任ヲ受クルニ非ラサレハ之ヲ行フ能ハストシテ左ノ場合ヲ示定セリ

控訴若クハ上告ヲ爲スヿ、再審ヲ求ムルヿ、代人ヲ任スルヿ、和解ヲ爲シ訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張スル請求ノ認諾ヲ爲スヿ

以上ハ尤モ重要ノ事項ナルト又本人ニ不利益ナランヲ慮リ特ニ委任ヲ要スヘシト定メタルモノナリ

又委任中ノ事項ト看做スヘカラサルハ純然タル訴訟上ノ行爲ニ屬セサルモノ例ヘハ前ニ掲クル訴訟費用以外ノ辨償ヲ受領スルヿ訴訟物件若クハ本人ヨリ預リタル證書ヲ對手人ニ引渡ス等ノ行爲是レナリ

又訴訟上能力ヲ有セサル者ノ法律上代人ハ自ラ代テ訴訟ヲ爲シ得ル以上ハ一切ノ制限ヲ被ラサルモノトス

本條ニ掲クル故障、假差押、假處分、強制執行、控訴、上告、再審ノヿハ後條ニ規定セリ又和解、拋棄、認諾ノヿハ民法ニ於テ研究セサル可ラス

第六十六條

前條第一項ニ掲クル法律上認定セル委任ノ權限ハ委任者ト受任者ノ間何等ノ制限ヲ加フルモ相手方ニ對シ効力ナキモノトス然レ𪜈委任者ト受任者ノ間ニ於テハ固ヨリ効力アルヲ以テ若シ受任者ニ於テ制限ヲ超過セル𪜈ハ其責ニ任セサル可ラス

辨護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ訴訟行爲ノ各箇ニ付委任スルヿヲ得ヘシ然レ𪜈前條ニ掲クル場合ハ一般ニ授權セラルヽモノト見做スヘキヲ以テ若シ各箇ノ訴訟行爲ニ付委任スルトキハ相手方ニ之カ通知ヲ爲サヽレハ効力ナキモノトス

〔參照〕

獨　第七十七條　訴訟委任ハ反訴及裁判手續ノ再施並ニ權制執行ヨリ生スル行爲ヲ合セ總テ訴訟ニ關スル訴訟上行爲ヲナスノ權代人並ニ上級裁判所ニ出ル訴訟代人ヲ委任

スルノ權、和解ヲナシ又ハ訴訟事件ノ拋棄ヲナシ又ハ對手ノ申立タル請求ヲ承諾シテ訴訟ヲ解除スルノ權對手ノ辨償スヘキ費用ヲ受領スルノ權アルモノトス

同　第七十八條　本訴訟ニ付テノ委任ハ本立入又ハ押置又ハ臨時處分ニ關スル裁判手續ニ付テノ委任ヲ包含スルモノトス

同　第七十九條　委任ノ法律上範圍ノ制限ハ和解ヲナシ又ハ訴訟事件ヲ拋棄シ又ハ對手ノ申立テタル請求ヲ承認シテ訴訟ヲ解除スルコトニ關スル場合ニ限リ對手ニ對シテ法律上効力ヲ有スルモノトス

代言人ヲ以テ代理セシムルコトヲ要セサル場合ニ限リ委任ハ各箇ノ訴訟上行爲ニ付キ之ヲ與フルコトヲ得

第六十七條　訴訟代理人數人アルトキハ共同若クハ各別ニテ代理スルコトヲ得但委任ニ此ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其効力ナシ

〔解義〕〔的例〕

本條ハ代理人數名アル場合ニ付示定セリ

本條數名ノ代理人原被告ヲ共同ニ又ハ各別ニ代理スルノ權アリト定メタルハ訴訟ヲシテ確定迅速ニ結了シ易ラシムルノ趣義ナリ

訴訟代理人數人アル片ハ共同ニ又行爲ノ各箇ニ付代理スルコトヲ得ヘシ若シ委任狀ニ全般及ヒ各箇ノ行爲ニ付委任スル如キ撞着アル片ハ對手人ニ對シ全ク法律上無効トナス

數名ノ代人別異ノ陳述ヲ爲シ例ヘハ一人ハ對手人ノ主張ヲ

承認シ他ノ一人ハ之ヲ辨駁シ又一人ハ審廷ニ於テ和解ヲ爲シ他ノ一人ハ之ヲ抗爭スル等ノ事アル片ハ本法第二百十七條ニ從ヒ之ヲ處分シ又一人和解ヲ爲シ他一人之ヲ抗爭スル場合ニ於テハ元來各自ニ完全ナル代理權アルヲ以テ一人ノ既ニ執行シタル行爲ニ對シテハ他ノ抗爭ハ成立タサルモノトナス

〔參照〕

獨　第八十條　數名ノ訴訟代人ハ共同シテ又ハ各箇ニ原被告ヲ代理スルノ權アルモノトス之ニ違フ委任ノ定メハ對手ニ對シ法律上効力ヲ有セス

第六十八條　訴訟代理人カ委任ノ範圍內ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

然レトモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ卽時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限リ其効力ヲ失フ

〔解義〕

本條ハ代理人ノ行爲ニ付テノ効力ヲ示定セリ

訴訟代理人カ本法第六十五條第一項ニ從ヒ委任ノ範圍內ニ於テノ行爲不行爲ハ本人ノ行爲不行爲ト同一ノ効力アルモノトス故ニ代理人カ範圍內ニ於テノ行爲不行爲ヨリ生スル責任ハ悉ク本人ニ於テ負擔セサル可ラス然レ𪜈委任權外ニ

渉リ例ヘハ特別ノ委任ナクシテ自認又ハ拋棄ヲ爲シタル片ハ相手方ニ對スルモ其効力ナキモノトス

又代理人カ審廷ニ於テノ事實上ノ陳述ハ即チ本人ノ陳述ト同一ナル効力ヲ生スルハ一般ノ原則ナレ𪜈若シ本人カ代理人ト共ニ出廷シ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタル片ハ其効力ヲ失フモノトス

〔參照〕

獨　第八十一條　訴訟代人ノナシタル訴訟上行爲ニ付原被告ハ其自己ニナシタル時ト同一ノ義務ヲ有スルモノトス

此規定ハ自認及其他ノ事實上陳述ニ之ヲ適用ス但共ニ出廷シタル原被告直ニ之ヲ取消シ又ハ更正スルトキハ此限ニアラス

第六十九條　委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其効力ナシ

此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲ササル間ハ其委任者ノ爲ニ行爲ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕

本條ハ代理委任ノ終期ニ付示定セリ

代理委任ノ消滅スル場合ハ民法財産取得篇第二百五十一條

ニ規定セリ

委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅セルヿヲ相手方ニ通知セサルトキハ其効力ナキモノトス何トナレハ通知ヲ爲サヽレハ相手方ニ於テ之ヲ知ル能ハサレハナリ

何ヲ以テ本條ニ掲クル各場合ニ於テ代理委任ノ消滅スルヤハ須ラク民法ニ於テ講究セサル可ラス

委任消滅ノ通知ハ原告若クハ被告ヨリ書面ヲ受訴裁判所ニ提出シ裁判所ヨリ相手方ニ送達スルモノトス

代理人ハ謝絶ヲ爲シ委任消滅スルモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ヲ防衛スルマテ其委任ノ行爲ヲ爲スヿヲ得ヘシ

而シテ委任者カ權利ヲ防衛スルマテ委任ノ行爲ヲ爲スハ特リ代理人ノ權利ナルノミナラス民法ノ原則ニ依ルトキハ本人若クハ相續人ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スマテ之ヲ處理スルノ義務アリ故ニ代理人俄ニ代理ヲ謝絶シ爲メニ本人ヲシテ他ノ代理人ヲ委任スルカ若クハ其他ノ方法ニ依リ權利ヲ防衛スルノ餘暇ナカラシムルトキハ代理人ハ民法上ノ原則ニ依リ其責ニ任セサル可ラス

〔參照〕

獨　第八十二條　委任ハ委任者ノ死去ニ依リ及ヒ其訴訟能力又ハ其法律上代理ノ變更ニ依リ効力ヲ失フコトナシ但訴訟代人訴訟延期ノ後相續人ニ代リ訴訟ヲナストキハ其委任狀ヲ呈出スヘシ

同　第八十三條　委任契約ノ解除ハ委任ノ消滅シタルコト

ヲ屆出ルニ依リ代言訴訟ニ於テハ他ノ代言人ニ委任シタルコトヲ屆出ルニ依リ始メテ對手ニ對シ法律上効力ヲ有スルモノトス

訴訟代人ハ自ラ解約スルモ委任者別ニ其權利ヲ執行スルノ方法ヲ定メサル間之ニ代リ處置スルモ妨ケナキモノトス

第七十條　委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス

裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保証ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ滿了後ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

〔解義〕〔理由〕

本條ハ委任ノ調査上ニ付示定セリ

代理人ニシテ委任ノ欠缺スル片ハ原告若クハ被告ノ爲メ毫モ代理ノ効ナキモノトス即チ審理中ナレハ相手方ヨリ異議ヲ申立ツルヲ得ヘシ又委任欠缺ノ儘裁判アリタル片ハ通常ノ上訴ハ勿論再審ヲモ爲スヿヲ得ヘシ(本法第四百六十八條)裁判所ハ職權ヲ以テモ委任ノ欠缺ヲ調査スルヿヲ得ヘシ何

トナレハ委任欠缺スル片ハ審理ハ全ク無効ニ歸スレハナリ
又裁判所ハ委任ナク若クハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出
頭シタル者ニ事情ニ依リ保證ヲ立シメ若クハ立シメスシテ
假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得ヘシ
委任ナク又ハ適式ノ委任ナキ代理人ニ假ノ訴訟行爲ヲ許シ
タル所以ノモノハ本人不在若クハ他ノ事故ニ依リ自ラ其權
利ヲ保護シ能ハサルヲ以テ第三者本人ノ依頼ヲ俟タス切迫
シタル損害ヲ救護スル等ノ場合ヲ豫慮シタルモノナリ
既ニ假ノ訴訟ヲ許シタル上ハ其者ノ爲シタル行爲ハ有効ナ
リトス然レ𪜈或定期間ニ欠缺若クハ不適法ヲ補正セサル片
ハ以前ニ溯リ最初ヨリ無効トナス且一方ノ請求ニ依リ欠席
判決ヲ與エサル可ラス

以上ノ如クナルヲ以テ之ヲ補正スルト否ニ拘ラス裁判所ハ
補正ノ爲メ與タル定期間内ハ裁判ヲ與フ可ラス又期限ヲ過
クルモ口頭辨論ノ終結マテハ之ヲ追完スルヿヲ得ヘシ

〔參照〕

獨　第八十四條　委任ノ缺乏ハ訴訟中何時タリトモ對手人
ヨリ之ヲ質責スルコトヲ得
裁判所ハ代言人ヲ以テ代理セシムルヲ要セサル場合ニ限
リ職權ヲ以テ委任ノ缺乏ナキヤニ注意スヘキモノトス
同　第八十五條　原被告一方ニ代リ委任ナクシテ事務擔當
者トナリ又ハ委任狀ヲ呈出スルコトナクシテ訴訟代人ト
ナリテ處置スル者ハ費用及損害ニ付テノ保證ヲナシ又ハ
之ヲナスコトナクシテ訴訟ヲナスコトヲ一時許サルヽコ

トヲ得終局判決ハ承諾書ヲ呈出スル爲メ定ムヘキ期限ノ經過シタル後始メテ之ヲ言渡スコトヲ許スモノトス

原被告ハ單ニ口頭上ノ委任ヲ與ヘタルトキ又ハ訴訟執行ヲ明諾シ又ハ默諾シタルトキト雖モ訴訟執行ヲ自己ニ對シテ効力アラシムヘキモノトス

第七十一條　原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人トヲ爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス

輔佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルトキニ限リ原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做ス

〔解義〕

本條ハ訴訟附添人ノ事ニ付示定セリ

本條ノ趣義ハ訴訟人ナシテ其權利伸暢ノ爲メ努メテ自由ヲ得セシメントスルニ在リ

原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲スヤ己一人ニテハ十分權利ヲ伸暢シ又ハ辯護ヲ爲スニ覺束ナシト思考スルヤハ辯護士又ハ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人トシテ(即チ現今ノ附添人)共ニ出頭スルコトヲ得ヘシ

輔佐人ノ職務タル通常代人ト異ナル所ナク權利ヲ伸暢シ又ハ主張ニ對シ辯護スルニ在リ然レヒ本人ト共ニ出廷スルモ

ノニシテ一人特立シテ訴訟ヲ擔任スルニアラサルヲ以テ他ノ代人ノ如ク委任ヲ必要トセサルナリ

輔佐人ノ供述ハ本人ニ於テ直ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサル片ハ即チ本人之ヲ認許スルモノト看做スヘキヲ以テ本人自ラ供述シタルト同一ノ効力アリトス

〔參照〕

獨　第八十六條　代人ヲ以テ代理セシムルヲ要セサル場合ニ限リ原被告ハ各訴訟能力者ヲ以テ附添人トナシ出廷スルコトヲ得

附添人ノ供述ハ之ヲ原被告ノ申立テタルモノト看做ス但原被告直ニ其供述ヲ取消シ又ハ更正スルトキハ此限ニアラス

第五節　訴訟費用

第七十二條　敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ辨濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル

訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ抛棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

〔解義〕

本條ハ訴訟費用負擔方ニ付示定セリ

訴訟費用トハ裁判所費用即チ裁判所ニ納ムヘキ費用(手數料

又ハ裁判所ノ立替金ノ類)及ヒ裁判所外ノ費用(代言人執達吏ノ手數料及ヒ立替金其他原被告ノ旅費又ハ食料書狀認料又ハ書狀送達料ノ類)ヲ云フ

訴訟費用ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ於テ負擔セサル可ラス而シテ其費用ハ訴訟ヨリ生シタルモノニシテ且裁判所ノ意見ニ於テ權利伸暢又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限レリ

右ノ外費用ニ關シ特ニ後條ニ掲クルモノ數多アリ本法第百七十七條第百九十八條第二百六十二條第二百九十四條第三百二十一條第三百三十二條第三百九十二條第四百九十二條第五百五十四條第五百六十四條第五百七十八條ノ如キ之ナリ

抑敗訴者ハ自己ノ費用ヲ辨償スル而已ナラス更ニ對手人ニ生シタル失費ヲモ辨償ス可キハ普通ノ原則ナリ然レ𪜈本法ハ例外トシテ三箇ノ場合ヲ示定セリ即チ第七十四條第七十六條第七十八條第二項之ナリ

又訴訟中ニ訴ヲ願下ケ請求ヲ抛棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル片ハ即チ自己ノ非理ヲ默認スルモノト見做スヘキヲ以テ法律上敗訴者ト同一ノ取扱ヲ受クルモノトス

〔參照〕

獨　第八十七條　敗訴者ハ訴訟費用ヲ擔當シ特ニ對手ニ生シタル費用ヲ辨償スヘキモノトス但其費用ハ裁判所ノ見込ヲ以テ相當ノ權利伸達又ハ權利辨護ノ爲メ必要ナリトスルモノニ限ル

勝訴者ノ代言人ノ手數料及立替金ハ總テノ訴訟ニ於テ之ヲ辨償スヘキモノトス他所ノ代言人ノ旅費ハ裁判所ノ見込ヲ以テ權利伸達又ハ權利辨護ノ爲メ必要ナリト認ムル場合ニ限リ之ヲ辨償スヘシ數名ノ代言人ノ費用ハ代言人ノ一名ノ費用ヲ超過セサル場合又ハ代言人ノ身上ニ關シ交代スヘキ場合ニ限リ之ヲ辨償スヘシ

第七十三條　當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルコトヲ得ス

然レトモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ラス且別段ノ費用ヲ生セサリシトキ又ハ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非ラサレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルコトヲ得サリシトキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

〔解義〕

本條ハ原被告兩造互ニ相勝敗スル場合ニ於テ其費用ヲ相消シ又ハ割合ニ應シテ分擔ス可キ事ヲ示定セルモノニシテ即チ前條ノ原則ヲ適用スルニ過キス

原被告勝敗相半ハスル時ハ裁判所ハ互ニ其費用ヲ相消スルカ若クハ曲直ノ程度ヲ計リ割合ヲ以テ分擔ス可キコトノ言渡ヲ爲スモノトス

其費用ヲ相消ストハ各當事者其支出シタル費用ヲ互ニ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨償ヲ請求セサルヲ云フ故ニ民法上ニ所謂義務相殺トハ互ニ相異ナルモノトス何トナレハ相殺ハ畢竟簡便ナル辨償方法ニ過キスシテ決シテ各自々辨スルノ趣義ニ在ラサレハナリ

割合ヲ以テ之ヲ分擔スルニハ或ハ原被告ノ一方ニ費用ノ幾部分ノ額ヲ定メテ之ヲ課シ其餘分ハ他ノ一方ヲシテ負擔セシメ或ハ一定ノ割合ヲ定メテ之ヲ負擔セシメ得ヘシ此割合ヲ定ムルニハ費用全般ノ積額ニ就テ之ヲ算當シ又ハ其部分ニ限リ之ヲ爲シ得ルナリ而シテ幾部分ノ額ヲ一定スルニハ原被告兩造ニ各生スル費用ノ全部ヲ合計シテ一額ト爲シ之ニ依テ其課スベキ多寡ヲ定メ又一定ノ割合ヲ爲スニハ對手人ノ負フタル費用ノ一定ノ割合額ヲ一方ヲシテ辨償セシムルナリ此他ニ至テハ兩造ノ支出スル費用ヲ各自辨スルノミ」

然レ𪜈裁判所ハ原被告一方ノ請求過當ナルモ其額僅少ニシテ特別ノ費用ヲ生セサリシトキ又判事ノ意見鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ依ラサレハ容易ニ過分ノ要求額ヲ知ル能ハサルトキハ裁判所ハ原被告一方ニ其費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得ヘシ

〔參照〕

獨　第八十八條　原被告ノ各方一部勝訴トナリ一部敗訴トナリタルトキ費用ハ互ニ消除シ又ハ割合ヲ以テ分擔スヘキモノトス

裁判所ハ一方ノ過分ノ要求割合ニ僅少ニシテ別段ノ費用

ヲ生セサリシトキ又ハ一方ノ要求額裁判官ノ見込ヲ以テスル確定又ハ鑑定人ノ鑑定又ハ相互ノ計算ニ依リ定マルトキハ他方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十四條　被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラス其負擔ニ歸ス

〔解義〕

本條ハ特ニ原告ニ於テ費用負擔ノ義務アル塲合ヲ示定セリ

本條ハ前第七十二條ノ原則ノ例外ニ似タリト雖モ唯其外觀ニ於テ然ルノミ即チ本條ハ被告ノ所爲ニ因テ起訴セシメタルニ非ラス且直ニ承認スル塲合ヲ示定セルモノナレハ原被告間現實ノ爭訟ナク又被告ニ本然ノ敗訴之レアラサルモノナリ

被告ノ所爲ニ因テ出訴セシムルニ至リタルヤ否ハ被告ノ答辨書又ハ審理期日ノ主張ニ依テ判斷セラル可キナリ

被告カ準備書面ノ交換ニ方テ原告ノ請求ニ抗爭シ而シテ口頭審理ノ期日ニ至テ之ヲ承認スル如キハ其各塲合ノ情狀ニ因テ直チニ請求ヲ承認シタルモノト看做サル可キナリ

本條ノ塲合ニ於テハ原告自己ニ支出シタル費用ヲ自辨シ且被告ニ生シタル費用ヲモ(本條第七十二條ニ基キ)辨償セサル可ラサルナリ

〔分析〕

本條ハ二箇ノ條件ヲ要ス

第一　被告ノ作爲即チ所爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメサルヲ要ス例ヘハ其義務ノ履行ヲ拒マス又ハ反對權利ヲ主張セサルヲ要ス而シテ辨償スヘキ資力ナキ爲メ辨償ヲ怠慢セル如キハ本條ノ優待ヲ受クルヲ得ス

第二　被告審理期日出廷スルカ又ハ代人ヲ出シテ直ニ其義務ヲ認諾スルヲ要ス

〔的例〕

本條ノ場合ハ原告カ被告ニ督促セスシテ直ニ權利上關係ノ存否ノ確定、證書ノ承認又ハ證書ノ正否ノ確定ニ付テ訴ヲ起ス等ノ時ニ生ス

〔參照〕

獨　第八十九條　被告其擧動ニ依リ訴訟ヲ提起スルニ至ラシメタルニアラサル場合ニ於テ被告其請求ヲ直ニ承認スルトキ訴訟費用ハ原告ノ責ニ歸スルモノトス

〔第七十五條〕　期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滯ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ラス此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條　裁判所ハ無益ナル攻擊又ハ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ラス其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

〔解義〕

本兩條ハ費用ノ特別負擔ヲ示定スルモノニシテ訴訟淹滯ヲ防遏スルカ爲メ有効ナリトス

第七十五條

原被告ノ一方期日(即チ口頭審理ノ期日)若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ己ノ過失ニ因リ期日ヲ更新セシメ辨論ヲ延期セシメ辨論續行ノ爲メニスル期日ヲ撰定セシメ(例ヘハ午前ノ時刻ヲ午後ニ移シ又ハ他日ニ讓ル如シ)若クハ期間ヲ延長セシメ其他訴訟ヲ遲滯セシメタル片ハ本案ノ勝訴者タルニ拘ラス爲ニ生セシメタル費用ヲ負擔セサル可ラス

第七十六條

又原被告ハ假令勝訴ヲ得ルト雖モ無益ナル攻擊又ハ防禦ノ方法ヲ主張スル片ハ之カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可キ言渡ヲ受クルヿアル可シ

然レ𪜈無益ナル攻擊又ハ防禦トアルハ前條ト同シク自ラ過失ノ意義ヲ包有セル者ナリ抑原被告ハ其權利ヲ伸暢スルニ不羈自由ナルヲ以テ若シ本條ヲ誤用スル片ハ大ニ權利ヲ損傷スルニ依リ裁判官ハ尤モ審議決定セサル可ラス

〔參照〕

獨　第九十條　裁判期日又ハ期限ヲ怠リタル原被告又ハ自己ノ過失ニ依リ裁判期日ヲ變換セシメ又ハ審問ヲ延期セシメ又ハ審問繼續ノ爲メニスル裁判期日ヲ定メシメ又ハ期限ヲ延長セシムルニ至ラシムル原被告ハ之ニ依テ生シタル費用ヲ擔當スヘキモノトス

同　第九十一條　効驗ナカリシ攻擊方又ハ辨護方ノ費用ハ本事件ニ於テ勝訴トナリタルトキト雖之ヲ申立タル原被告ニ負擔セシムルコトヲ得

第七十七條　無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十八條　上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルトキハ訴訟ノ總費用(上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實又ハ攻擊若クハ防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ其原告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルコトヲ得

〔解義〕

本兩條ハ上訴ニ關スル訴訟費用ニ付示定セリ

第七十七條

本條ハ本法第七十二條ニ定ムル普通原則ニ適合スルモノナリ無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ハ即チ敗訴シタルト同一ニ見做ス可キモノナリ

第七十八條

上訴ニ因リ全部若クハ一部ノ効力ヲ生シ前裁判ノ更改セラレタルトキハ從テ前裁判ハ消滅ニ歸ス可キヲ以テ更ニ前後ノ

訴訟費用ニ付言渡ヲ爲サヽル可ラス而シテ其費用ノ負擔方ハ普通ノ原則ニ準據シ即チ本法第七十二條ニ依リ敗訴者之ヲ辨償シ又勝敗相半ハスルトキハ第七十三條ニ依テ決セサル可ラス

然レトモ原告若クハ被告カ前訴訟ニ於テ提出シ得ヘカリシ事實又ハ攻擊若クハ防禦ノ方法ヲ新ニ上級裁判所ニ提出シ爲ニ勝訴ト爲ルトキハ即チ原告若クハ被告ノ怠慢タルヲ免レサルヲ以テ仮令勝訴トナルモ上訴費用ノ全部又ハ一部ヲ負擔セシメラルヽアル可キナリ

〔參照〕

獨　第九十二條　呈出シタル効驗ナキ上訴ノ費用ハ之ヲ呈出シタル原被告ノ責ニ歸スルモノトス

控訴裁判ノ費用ハ裁判所ノ見込ニ從ヒ始審裁判ニ於テ申立ルコトヲ得ヘシト認メタル新ナル事實ニ依リ勝訴トナルトキハ勝訴者ニ其全部又ハ一部ヲ負擔セシムルコトヲ得

訴訟事件ノ價額ニ拘ハラス地方裁判所特ニ權限ヲ有スル請求ニ付テノ訴訟ニ關スル上告裁判ノ費用ハ訴訟事件ノ價額三百〔マルク〕以下ニシテ獨逸國又ハ各邦ノ代人上告ヲナシタルトキハ勝訴ノ場合ト雖獨逸國又ハ各邦ノ國庫之ヲ擔當スヘキモノトス

第七十九條　當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ爲シタ

ルトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕

本條ハ和解ニ付テノ費用負擔方ヲ示定セリ

訴訟物ニ付テ和解シタル片ハ訴訟及ヒ和解ノ費用ハ互ニ之ヲ消除スルモノトス然レ𪜈契約ハ自由ナリ原則ニ依リ雙方ハ種々ニ契約シ得ヘキナリ

和解ハ互ニ權利ノ一部ヲ推讓スルモノニシテ互ニ曲直ナキモノト見做ス可キヲ以テ費用ニ至テモ互ニ相消除ス可キハ當然ナリトス

〔參照〕

獨　第九十三條　完結シタル和解ノ費用ハ原被告ニ於テ別段ノ契約ナキトキハ互ニ消除シタルモノト看做スヘキモノトス和解ニ依リ完結シタル訴訟ノ費用ニ付テモ亦同シ但此費用ニ付テノ言渡未タ確定セサルトキニ限ル

第八十條　法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限リ其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レ𪜈共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻擊又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタルトキハ他ノ共同訴訟人ハ此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔セス

〔解義〕

本條ハ共同訴訟人ノ費用負擔方ニ付示定セリ

共同訴訟人ハ訴訟費用ニ付分頭平等ニ負擔スルヲ以テ普通トナシ法律ノ規定ニ從ヒ訴訟費用ニ付連帶義務ヲ生スルヲ以テ之カ例外トナス而シテ連帶義務アルトキハ對手人トノ關係及ヒ共同訴訟人相互間ノ關係ニ付如何ナル効果ヲ生スル、カハ民法ノ規定ニ依テ決セサル可ラス又共同訴訟人間其利害ノ關係著シク異ナルトキハ其關係ノ割合ニ從ヒ負擔セシムルコトヲ得ヘシ(例ヘハ所有者用益者ニ係リ物上ノ訴訟ヲ起シタルトキノ如シ)

又共同訴訟人ハ互ニ相獨立シテ攻擊辨護ヲ爲シ得ヘキヲ以テ若シ共同者ノ一人特別ノ攻擊又ハ防禦ノ方法ヲ用ヒ之カ爲ニ費用ヲ生シタルトキハ固ヨリ其者ノ負擔ニ歸セサル可ラス

〔參照〕

獨 第九十五條 敗訴者數人ナルトキ其數人ハ費用辨償ニ付キ平等ニ其責ヲ負フモノトス

訴訟ノ立入ニ著シキ差異アルトキハ裁判所ノ見込ニ依リ其立入ヲ標準トナスコトヲ得

訴訟仲間ノ一名特別ノ攻擊方又ハ辨護方ヲ申立テタルトキ其他ノ訴訟仲間ハ之カ爲メ生シタル費用ニ付キ其責ナキモノトス

民法ノ規定ニ依ル費用ニ付キ連帶シテ責ニ任スヘキ義務ハ本條ノ規定ノ爲メ變更ヲ受クルコトナシ

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議

ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

從參加ヲ許シタルトキ又ハ異議ヲ述ヘサルトキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

〔解義〕

本條ハ從參加ノ費用ニ付示定セリ

原告若クハ被告カ從參加ニ對シ異議ヲ述フルトキハ一ノ中間判決ヲ爲ス可キモノトス此時ハ本法第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒ中間訴訟ヨリ生スル費用ニ付併セテ判決セサル可ラス

裁判所ニ於テ從參加ヲ許シタルトキ又ハ一方異議ヲ述ヘサルトキハ猶ホ前數條ノ規定ニ從ヒ本案判決ト共ニ從參加ニ付生シタル費用ノ負擔ヲ決定セサル可ラス

主參加ニ付テハ固ヨリ前數條ニ從ヒ決定ス可シト雖モ訴訟告知若クハ本人指示ニ付テノ費用ハ告知者又ハ指示者ニ於テ負擔セサル可ラス然レモ被告知人被指示人ニシテ訴訟ニ參加スルトキハ即チ從參加人トナルヲ以テ本條ノ規定ニ從フ可キモノトス

〔參照〕

獨　第九十六條　第八十七條ヨリ第九十三條マテノ規定ハ副立入ニ依リ生シタル費用ニモ亦之ヲ適用スルモノトス副立入人本原被告ノ訴訟仲間トナルトキハ(第六十六條)第九十五條ノ規定ニ依ルモノトス

第八十二條　費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レ𪜈本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルトキニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

費用ノ點ニ限リタルトキト雖𪜈相手方ヨリ提出シタル上訴ニ附帶スル場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

〔解義〕

本條ハ費用ノ裁判ニ對スル上訴ノ事ニ付示定セリ

費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス然レ𪜈本案ノ裁判ニ對シ上訴スル片ハ最早費用ノ點ノミニ付審理ヲ許サヽルノ理由ナキヲ以テ此場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ヘシ

又相手方ヨリ上訴シタル片ハ費用ノ點ニ限リタル裁判ニテモ之ニ附帶シテ上訴スルコトヲ得ヘシ

上來ノ如クナルヲ以テ費用ノ裁判ニ付テハ遂ニ上訴ヲ爲ス能ハサル塲合之レアルヘシ例ヘハ本法第七十四條第七十六條第七十八條第二項ニ於ケル如キ之ナリ

〔參照〕

獨　第九十四條　費用ニ付テノ裁決ニ對スル不服ハ本事件

ニ於ケル裁決ニ對シ上訴ヲ呈出セサルトキハ之ヲ許サヽルモノトス

第八十三條　裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシムル決定ヲ爲スコトヲ得但其決定前關係人ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

其決定ニ對シテハ卽時抗告ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕

本條ハ一定ノ人ノ過失ニ因リ費用ヲ負擔スル場合ヲ示定セリ

裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ハ己ノ過失怠慢ニ因リ費用ヲ生セシメタル片ハ之カ辨償ノ責ニ任セシメラルヽアル可シ、裁判所ハ當事者ノ申立ニ因ルモ又職權ヲ以テモ之カ決定ヲ爲スコトヲ得ヘシ然レ𪜈決定以前ニ於テ之カ關係人(卽チ辨償ノ責任アル者及ヒ訴訟人)ニ口頭又ハ書面ヲ以テ陳辯ヲ爲サシメサル可ラス、

費用ヲ生セシメタル片トハ依賴本人ノ爲メ生シタル費用ノミナラス相手人ニ對シ生セシメタル費用ヲモ含蓄スルナリ

右裁判ハ口頭辨論ヲ經スシテ爲スコトヲ得ヘシ又其判決ヲ受ケタル者及ヒ申立ヲ却下セラレタル者(卽チ原被告)ハ卽時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ

（參照）

獨　第九十七條　訴訟裁判所ハ裁判所書記、法律上代人、代言人及其他ノ訴訟代人並ニ裁判所使吏ニ對シ其大過失ニ依リ生シタル費用ヲ職權ヲ以テモ亦擔當セシムルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

其裁決ハ口頭上ノ審問ナクシテ之ヲナスコトヲ得其裁決前關係者ハ尋問セラルヘキモノトス

其裁決ニ對シテハ即時故障ヲ申立ルコトヲ得

第八十四條　辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

申請ハ第七十二條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除ク外執行シ得ヘキ裁判ニ依ルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書、相手方ニ附與ス可キ計算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ疏明ニ必要ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十五條　費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ檢査ヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間內ニ陳述ヲ

爲ス可キ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條　當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ分擔ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ムル期間內ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ顧ミス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ケト爲ルコト無シ

〔解義〕〔理由〕

此三條ハ對手人ニ辨償ス可キ費用額ヲ裁判所ニ於テ確定スル事ニ付示定セリ

第八十四條

費用額ノ確定ハ當事者ノ申請ニ因リ第一審ニ繫屬シタル裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

又費用額確定ニ付テノ申請ハ第七十二條ニ定ムル訴ヲ取下ケ請求ヲ抛棄シ又相手方ノ請求ヲ認諾スル場合及ヒ上訴取下ノ場合ヲ除キ其他ハ必ス執行シ得ヘキ裁判ニ在ラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

執行シ得ヘキ裁判トハ確定裁判、假執行附ノ判決、執行裁判、和解及ヒ執行ス可キ證書ヲ云フモノニシテ本法第四百九十七條第五百三條第五百十四條第五百十五條第五百五十九條第三第四第五第五百六十二條是ナリ

抑本案審理中費用ノ項目ヲ證明スルハ困難ニシテ爲ニ審理ヲ中止スルヿアリ又口頭審理ニ付テ冗贅ナル材料ヲ要セシムルヿアル可シ加之訴訟中ハ概シテ費用ヲ確定スル能ハス又初審裁判ノ變更スルヿアリテ徒勞ニ屬スルヿアル可キナリ是ヲ以テ本條ハ裁判言渡ノ確定シタル後初テ計算シ且確定スルモノト決定セリ

第一審ニ繫屬シタル裁判所トアリ故ニ上級裁判所ニテ生シタル費用ト雖ヒ第一審裁判所ニ於テ確定ス可キハ明カナリ又本條ハ簡便ニシテ迅速ナル審理手續ヲ採用シ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ爲シ得ヘク申請ニハ計算書幷ニ計算書ノ謄本及ヒ疎明書類ヲ添附スルノミニテ足レリトセリ

第八十五條

費用確定ノ裁判ニ付テハ口頭辨論ヲ用ユルト否トハ裁判官ノ斟酌ニ任セリ蓋シ費用確定ノ裁判ハ本案ノ裁判ニ何等ノ効力ヲ及ホサヽルヲ以テ成ルヘク簡易迅速ニシテ費用ノ輕減ヲ主トセサル可ラス故ニ寧ロ口頭審理ヲ用ヒサルヲ可トスヘシト雖ヒ若シ繁難必用アルトキハ口頭審理ヲ開ク固ヨリ不可ナルコトナシトス

費用確定ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヿヲ得ヘキナリ而シテ其期限及ヒ期限ノ起算ハ後條ニ至リ知ルコトヲ得ヘシ

第八十六條

本條ハ割合分擔ヲ爲ス場合ニ於テ費用確定ノ裁判ヲ爲ス方法ヲ定ムルモノナリ

〔參照〕

獨　第九十八條　訴訟費用辨償ニ付テノ請求ハ權制執行ヲナスニ適切ナル名義ニ依ルニアラサレハ之ヲ申立ルコトヲ得ス

辨償スヘキ額ヲ確定スル爲メノ申立ハ之ヲ始審裁判所ニナスヘキモノトス其申立ハ裁判所書記ニ陳述シテ之ヲ筆記セシムルコトヲ得費用計算書及對手ニ交付スヘキ其計算書ノ謄本並ニ各箇金額ノ辨明ニ供スル證書ヲ添フヘシ

同　第九十九條　其確定申立ニ付テノ裁決ハ豫メ口頭上ノ審問ナクシテ之ヲナスコトヲ得

各箇ノ金額ヲ採用スルニハ之ヲ證明スルヲ以テ足レリトス

其確定ヲナス決議ニ對シテハ即時故障ヲ申立ルコトヲ得

同　第百條　訴訟費用ハ全部又ハ一部ヲ割合ニ從ヒ分配シタルトキ原被告ハ對手ニ對シ辨償額確定ノ申立ヲナス前ニ費用ノ計算書ヲ一週ノ期限內ニ裁判所ニ呈出スヘキコトヲ督促スヘキモノトス此期限空シク經過シタル後ハ對手ノ費用ニ拘ラス裁決ヲナスモノトス對手ハ之レカ爲メ後日費用辨償ニ付テノ請求ヲナスノ權ヲ害セラルヽコトナシ又對手ハ後日ノ裁判手續ニ依リ生スル費用增額ニ付キ其責ヲ負擔スルモノトス

第六節　保證

第八十七條　訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク外

裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ訴訟ニ關スル保證(訴訟上ノ擔保)ヲ立テ得ヘキ一般ノ通則ヲ示定セリ

訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合及ヒ裁判所ノ自由ナル意見ニ任ス場合ヲ除ク外裁判所ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲サヽル可ラス

有價證券トハ公債證書、鉄道株券、銀行株券ノ如キヲ云フ然レトモ爲替證書、書入質證書ノ如キ苟モ價格ヲ有スルモノナレハ均シク有價證券中ニ包含セシムルヲ可トス決シテ市場又ハ取引所ニ於テ日々相場ヲ定ムル證券ニノミ局限スルノ理由アラサルナリ

現金又ハ有價證券トアリ故ニ抵當物又ハ保證人ヲ以テ保證スルヲ許サス若シ此類ノ方法ヲ以テ保證ヲ立テシムル片ハ保證義務ニ付テノ爭訴ノ外更ニ保證方法ノ當否ニ付テ紛爭ヲ起シ爲メニ訴訟ヲシテ淹滯ニ至ラシムル丁往々ニシテ之レアルヲ免レス是レ本條ニ於テ現金又ハ有價證券ニ制限シ務メテ簡單ナル方法ヲ執リタル所以ナリ

當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク外トアリ故ニ合意又ハ此法律ニ於テ裁判所ノ意見ニ任スル場合ハ必ス現金又ハ有價證券ナラサルモ抵當又ハ保證人ヲ以テ保

證セシムルコトヲ得ヘシ

此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ハ本法第七百四十一條第七百四十五條ニ規定セリ

訴訟ニ關スル保證ニ付テハ次條以下ニ定ムル外本法第五百條第五百三條第五百五條第五百十二條第五百四十七條第五百四十九條第七百四十三條第七百五十九條ニ示定セリ

保證金預置ノ方法ハ特別規則ニ依テ定メラルヘシ

〔參照〕

獨　第百一條　訴訟上ノ保證ハ原被告ニ於テ別段ノ契約ヲナサス又ハ此法律ニ於テ裁判所ノ見込ヲ以テ定ムヘキ保證ヲ許ス場合ニ限リ現金又ハ裁判所ノ見込ニ依リ充分引當ナトル有價證券ヲ藏寄シテ之ヲナスヘキモノトス

第八十八條　原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツ可シ

左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生セス

第一　國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツル義務ナキトキ

第二　反訴ノ場合

第三　證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四　公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

〔解義〕〔理由〕

本條ハ原告トナリタル外國人ニ訴訟費用ノ保證ヲ立ルノ義務ヲ負ハシム可キ事ヲ示定セリ

原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ノ請求アル片訴訟費用ニ付保證ヲ立テサル可ラス

原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人トアリ故ニ外國人ト雖ヒ被告人トナル片ハ保證ヲ立ツルノ義務ナシ何トナレハ自ラ進テ訴訟ヲ爲スニアラサレハナリ抑又原告タル外國人ヲシテ保證ヲ立テシムル所以ハモノハ外國人ハ異域ニ住居シ隨テ財產モ本國ニ存在スヘキヲ以テ一朝訴訟ヲ起シ若シ己ノ敗訴ニ歸シタル片ハ自由ニ本國ニ歸リ被告ハ遂ニ訴訟費用ノ辨償ヲ得ルコトノ道ヲ失スルヿアレハナリ

其求ニ因リトアリ故ニ被告ノ請求ナキ片ハ固ヨリ保證ヲ立テスシテ可ナリ若シ被告ニシテ之ヲ求ムル片ハ地方裁判所ニ於テハ本案ノ審問前ニ之ヲ爲スヲ要ス(本法第二百六條)又被告ハ原告カ保證ヲ立テサル片訴訟ノ答辨ヲ拒ムコトヲ得(本法第二百七條)又區裁判所及ヒ控訴ノ場合ニ於テハ本法第三百七十九條及第四百十四條ヲ參看ス可シ

訴訟費用ニ付キトアリ故ニ保證ノ請求ハ訴訟費用ニ付キテ之ヲ爲スヿヲ得ルノミ

又被告ハ保證ヲ請求スルニハ其原告外國人タル事實ヲ擧クルヲ以テ足レリトナス

本條第二項ニハ外國人ト雖ヒ保證義務ヲ免ル可キ四個ノ場合ヲ擧示セリ

第一ノ場合ニ於テ保證義務ヲ免シタルハ必竟交互相應的ニ

基ケルモノナリ

第二及ヒ第四ノ場合ニ於テ保證義務ヲ免シタルハ元此訴訟タル被告ヨリ先キニ攻擊セルニ因テ起ルノ理由ニ出ルモノナリ第四公示催告ニ關シテハ本法第七編ニ規定セリ

第三ノ場合ニ於テ保證義務ヲ免シタルハ此等ノ訴訟ニ付テハ別ニ簡易迅速ナル審判手續ヲ特定スルニ由レリ證書訴訟及ヒ爲替訴訟ニ付テハ本法第五篇ニ規定セリ

〔辨疑〕

本法ニ於テハ原告訴訟進行中本邦人タル資格ヲ失フ時又外國人ニシテ保證義務ヲ免レタル條件ノ消滅セル時ニ何等ノ規定ナキハ猶ホ此場合ニ於テモ保證義務ヲ免除スルノ精神ナリヤ如何曰ク否ラス假令別段ノ規定ナシト雖モ本條ノ律意ヨリ推考スルトキハ此等ノ場合ニ於テハ當然保證義務ヲ生スルモノト決定セサル可ラス何トナレハ此等ノ場合ノ生スルトキハ最早免除スルノ理由存セサレハナリ故ニ若シ此等ノ事故生スルトキハ被告ハ保證ノ請求ヲ爲シ得ヘキナリ

〔參照〕

獨　第百二條　原告タル外國人ハ被告ノ求メニ依リ之ニ訴訟費用ニ付テノ保證ヲナスヘキモノトス

此ノ義務ハ左ノ場合ニ於テハ生セサルモノトス

第一　原告ノ屬スル國ノ法律ニ從ヒ獨逸人同一ノ場合ニ於テ保證ヲナスノ義務ナキトキ

第二　證書裁判又ハ爲替裁判ニ於ケルトキ

第三　反訴ノトキ

第四　公告ヲ以テスル督促ニ依リ提起スル訴訟ナルトキ

第五　獨逸國官署ノ地所帳又ハ書入質帳ニ記入セラレタル請求ヨリ起ル訴訟ナルトキ

第八十九條　裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ

此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追增保證ヲ立ツ可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕

本條ハ原告ノ爲ス可キ保證ハ裁判所其額ヲ定ム可キコトヲ示定セリ

前條第一項ノ原告タル外國人カ保證ヲ立ツ可キ場合ニ於テ其保證ノ數額ヲ定ムルハ裁判所ノ任ナリトス

然レ𪜈裁判所ニ於テ之カ保證額ヲ定ムルニハ被告カ訴ヲ受ケタル爲ニ初審及上級審ニ於テ支出ス可シト認ムル訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲サヽル可ラス

又訴訟進行中保證ノ不足ヲ生シ且被告ヨリ追增保證ヲ要求スル時ニ在テモ前ト同シク被告カ支出ス可キ費用ヲ標準トシテ定メサル可ラス然レ𪜈原告カ請求セル中ヨリ被告カ認諾セル部分ニテ擔保ニ十分ナリト認ムルトキハ故ラ追增保

證ヲ爲スノ必要アラサル可シ

裁判所ハ以上保證義務ノ有無及ヒ其數額ニ付爭アルトキハ裁判ヲ爲サヽル可ラス而シテ棄却ノ裁判ニ對シテハ直ニ控訴スルコトヲ得ヘキモ此他ノ場合ニ於テハ本案終局判決ニ對スル控訴ヲ併セテ爲サヽレハ之ヲ許サヽルナリ(本法第二百七條第三百九十七條)

又訴訟進行中保證額ニ不足ヲ生スルハ其原因ノ如何ニ出ツルヲ問ハサルナリ故ニ先ニ差入レタル有價證券ノ相場下落セルニ依ルコトアリ或ハ最初ノ評定寡價ニ失セルノ明カナルニ因レルコトモアラン

〔參照〕

獨　第百四條　保證ヲナスノ額ハ裁判所其見込ヲ以テ之ヲ確定スルモノトス

其確定ニ方テハ被告ノ支出スヘキ訴訟費用ノ額ヲ標準トナスヘキモノトス反訴ニ依リ被告ニ生スル費用ハ之ヲ限外トス

訴訟中保證ニ不足アルコトノ判然スルトキ被告ハ引當ニ充分ナル訴訟上請求ノ部分ニ付異議アル場合ニ限リ更ニ保證ヲ求ムルコトヲ得

第九十條　裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ經過後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルト

キハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

二百六十二

〔解義〕

本條ハ裁判所カ保證ヲ命スルニ當テ之カ期間ヲ定ム可キコトヲ示定セリ

裁判所ハ保證ヲ命スルト同時ニ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定メサル可ラス

若シ期間内ニ保證ヲ立テサル片ハ被告ハ原告カ其訴ヲ取下ケタリトノ宣言アランヿ又訴訟カ上訴ニ係ル片ハ其上訴ヲ取下ケタリトノ宣言アランヿノ請求ヲ爲シ得ヘキナリ

上訴中此宣言ヲ受ケタル片ハ原告ノ權利上ニ蒙ムル可キ損害殊ニ著大ナリトス何トナレハ訴訟却下ノ言渡ヲ受クル片ハ原判決遂ニ確定スレハナリ

然レ𪜈本條ノ期間タル不變期間ニ非ラサルヲ以テ假令其期ニ後ルヽ𪜈未タ棄却ノ判決アラサル以前ナレハ之カ保證ヲ立ツルコトヲ許サヽル可ラサルナリ

又期間ノ進行ハ其言渡ヲ以テ始ム可シ此期間タル不變期間ニ在ラサルヲ以テ本法第百六十九條乃至第百七十一條ヲ適用シ相當ノ理由アル片ハ其期間ヲ伸縮スルコトヲ得ヘキナリ

〔參照〕

獨　第百五條　裁判所ハ保證ヲ命スルノ際原告ニ對シ保證ヲナスヘキ期限ヲ定ムヘキモノトス其期限經過ノ後其裁決マテニ保證ヲナサヽルトキハ被告ノ申立ニ依リ訴訟ヲ取下ケタルモノトシテ言渡シ又原告ノ上訴ニ付キ審問ス

二百六十三

ベキトキハ其上訴ヲ棄却スベシ

第七節　訴訟上ノ救助

第九十一條　何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出タスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條　外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限リ之ヲ求ムルコトヲ得

〔解義〕

此兩條ハ無資力者訴訟上ノ救助ニ關スル要件ヲ示定セリ

第九十一條

自己及ヒ家屬ノ必須ナル生計ヲ欲クニ非サレハ訴訟費用ノ辨償ヲ爲シ能ハサル者ハ費用ノ猶豫ヲ認可セラル可キ請求ヲ爲シ得ヘキナリ而シテ此猶豫ヲ請求スルニハ其目的トスル權利ノ伸暢又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込アルモノト認定ス可キ時ニ限レリ

必要ナル生活ヲ欲クニ非ラサレハ訴訟費用ヲ出タスコト能ハサル者トアリ故ニ一口ニ云ヘハ無資力者ナラサレハ此恩典ニ與カルヲ得ス而シテ如何ナル者ヲ無資力トスルカニ至テハ別ニ規定セスト雖僅少ノ公費ヲ納ムルカ又ハ全ク之ヲ出サス且其無資力ナルカ爲メ裁判所ニ請テ權利ヲ伸暢シ能

ハサル者ハ概子無資力者ト見做ス可キナリ而シテ無資力ヲ證明スル方法ニ至テハ本法第九十三條ニ示定セリ

其目的トスル權利ノ伸暢又ハ防禦ノ輕忽ナラサルヤ否又ハ見込アリト認定スルニ足ル可キヤ否ニ至テハ偏ニ裁判所ノ所見ニ任サヽル可ラス然レ𪜈見込ナキニ非ラスト見ユルトキトアルハ必ス勝訴トナル塲合ニ局限ス可ラス訴訟ノ勝敗ハ到底結局ニ至ラサレハ之ヲ知ルコト能ハス只最初一見スル所ニ於テ見込アリト認メラルレハ可ナリ又權利伸暢及ヒ防禦ニ付テハ敢テ其種類ノ何タルヲ問フヲ要セス督促命令手續又ハ證據保全手續ノ類ニテモ亦辨償猶豫ヲ求ムルコトヲ得ヘキナリ

第九十二條

外國人ハ國際條約ニ於テ彼我互ニ猶豫ヲ請求スルコトノ定メアルカ又ハ本邦人カ同一ノ塲合ニ遭逢スル𪜈其外國ノ法律ニ依テ救助ヲ求ムルコトヲ得ヘキ𪜈ハ之ヲ求ムルコトヲ得ヘシ是レ彼我應酬ノ旨趣ニ基クモノナリ

〔理由〕

無資力者ニ訴訟上ノ救助ヲ與フル所以ハ貧人富者ノ權利ヲ平等ニ保護スルノ趣旨ニ因由ス

〔參照〕

獨　第百六條　何人タリトモ自己及其家族ノ爲メ必要ナル生計ヲ害スルニアラサレハ訴訟費用ヲ支拂フコト能ハサル者ハ其主旨タル權利伸達又ハ權利辨護ヲ輕卒ニ出テ又ハ見込ナクシテナシタリト認ムヘカラサルトキ受救權ノ

許可ヲ受ルノ請求ヲナスコトヲ得

外國人ハ相互ノ保證アル場合ニ限リ受救權ヲ受ルノ請求ヲナスコトヲ得

第九十三條　訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出タスコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産竝ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直稅ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

〔解義〕

本條ハ訴訟救助ノ申請方法ヲ示定セリ

訴訟上救助ノ申請ハ權利ノ關係及ヒ立證方法ヲ表示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ提出セサル可ラス又申請ハ必ス書面ニ依ラサルモ口頭ヲ以テモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ

救助ヲ求ムル審級ノ裁判所トアリ故ニ初審裁判所ニ限ラス請願ヲ爲スヤ訴訟ノ受理セラレタル裁判所ヲモ包含スルハ明カナリ

又申請ヲ爲ス原被告ハ其申請ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル無資力證明書ヲ提出セサル可ラス而シテ其證明書ニハ原告若クハ被告ノ身分職業財産竝ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直稅ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支辨ノ資力ナキコトヲ證

スルヲ要ス

〔理由〕

救助ノ申請ヲ爲スニ訴訟ノ關係及ヒ證據方法ヲ表示セシムルハ裁判所カ輕忽ノ訴訟タルヤ否ヲ審理スルニ便ナラシムルモノナリ若シ證明方法ノ不十分ナルトキハ裁判所ハ之ヲ補充セシムルコトヲ得ヘキナリ(本法第百十二條)

〔參照〕

獨　第百九條　受救權ノ許可ヲ求ルノ申立ハ訴訟裁判所ニ呈出スヘキモノトス其申立ハ裁判所書記ニ口述シテ筆記セシムルコトヲ得

其申立ニハ管轄官署ヨリ原被告ニ交付シタル證書ヲ添フヘシ其證書ニハ原被告ノ身分又ハ職業、財產ノ現狀及家族ノ關係幷ニ原被告ノ納ムヘキ直接國稅ノ額ヲ記載シテ訴訟費用ノ辨償無資力ヲ明證スルモノトス後見又ハ管財人ニアリテハ後見官署ニ於テモ亦其證書ヲ交付スルコトヲ得

其申立ニハ證據物ヲ記載シテ訴訟ノ關係ヲ明ニスヘキモノトス

第九十四條　訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ强制執行ニ付テモ之ヲ付與スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ資力ヲ證スルコトヲ要セス相手方上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上ノ

救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤヲ調査スルコトヲ要セス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ訴訟上ノ救助ノ認否ハ毎級裁判所ニ於テ爲ス可キコトヲ示定セリ

訴訟上ノ救助ハ毎級裁判所ニ於テ之ヲ附與ス何トナレハ原裁判所ニ於テ與ヘタル審査ハ上級裁判所ヲ拘束スルノ理ナケレハナリ

又第一審裁判所ニ於テ救助ヲ與ヘタル片ハ強制執行ニ付テモ之ヲ含蓄スルモノトス

前審ニ於テ救助ヲ受ケタル片ハ上級審ニ於テ最早無資力ヲ證スルヲ要セス何トナレハ前審ニ於テ救助ヲ受ケタル片ハ當然無資力ヲ認定スルニ足レハナリ而シテ此時ト雖輕忽ノ訴訟タルヤ否又見込ナキニアラスト見ユルヤ否ニ至テハ猶ホ調査ヲ遂ケサル可ラス若シ輕忽ノ訴訟ナルカ又ハ見込アリト見エサル片ハ上級審ハ之カ救助ヲ許可セサルコトヲ得ヘシ

然レ𪜈相手方ニ於テ上訴シタル片ハ唯前審ニ於テ救助ヲ受ケタル而已ヲ以テ足レリトス何トナレハ自ラ進テ訴訟ヲ起スニ非ラサレハナリ

又強制執行處分ニ至テ未タ申請セサル救助ヲ請願シ得ヘキナリ例ヘハ本法第五百四十九條ニ依リ參加シタル第三者又ハ訴訟本人ニ於テモ之ヲ爲シ得ヘシ

〔參照〕

獨逸第百十條受救權ヲ受ルノ許可ハ各階級ノ裁判所ニ於テ各別ニ之ヲナシ始審裁判所ニ於テハ權利執行ヲ合シ之ヲナスモノトス

上級ノ裁判所ニ於テハ下級ノ裁判所ニ於テ受救權ヲ許可セシトキ無資力ノ證明ヲ要セス對手上訴ヲナシタルトキ上級ノ裁判所ニ於テハ其原被告ノ權利伸達及權利辨護ヲ輕卒ニ出テ又ハ見込ナクシテナシタリト認ムヘキヤヲ檢査スルコトヲ要セス

第九十五條　訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セサリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時タリトモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條　訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

〔解義〕

此兩條ハ救助ノ消滅スル場合ヲ示定セリ

第九十五條

訴訟ノ救助ハ本法第九十一條ニ規定スル如ク無資力ナルヿ輕忽ナラサルヿノ二條件ヨリ成立ス若シ此二條件ノ中一種ニテモ當初ヨリ備ラサルカ又ハ後日ニ於テ之レナキニ至リタル片ハ裁判所ハ職權ニテモ又對手人ノ申立ニ因ルモ之カ救助ヲ取消シ得ヘキナリ而シテ其取消ノ効力ハ只當初ヨリノ又後日ノ資産上ノ景況ニ因テ之ヲ取消シタル場合ニ限リ其既ニ經過シタル時期中ノ費用ニマテ及ホスナリ何トナレ

ハ本法第百條ニ據ルモ資產ノ回復ニ因テハ追納スルノ義務アルモノト定メアレハナリ

第九十六條　訴訟上ノ救助ハ無資力者ノ相續人ニ向テモ之ヲ與ヘタルモノト云フ可ラス故ニ救助ハ其原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス可キナリ然シ此者等ト雖モ規定スル所ノ要件アルニ於テハ更ニ之カ申請ヲ爲シ得ヘキナリ

此他之ヲ取消ス可キ原因ナキニアラス例ヘハ本法第五十八條第六十二條ノ如ク其救助ヲ受クル訴訟人訴訟ヲ脫スル時ノ如キ之ナリ

〔參照〕

獨　第百十二條　受救權ハ其許可ノ要件存セサリシコト又ハ消滅シタルコトノ判然スルトキ何時ニテモ之ヲ取上ルコトヲ得

同　第百十三條　受救權ハ其許可ヲ受ケタル人ノ死去ト共ニ消滅スルモノトス

第九十七條　訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ効力ヲ生ス

第一　裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟清スルコトノ假免除

第二　訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三　送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救

助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕

本條ハ訴訟上救助ノ効力ヲ示定セリ

訴訟救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ左ノ事項ニ對シ辨償猶豫ヲ得ルモノトス

第一　裁判費用ヲ辨濟スル假免除

裁判費用ニハ國庫ノ立替金ヲ包含ス立替金トハ郵便稅登記手數料旅費等ノ類ヲ云フ又假免除トハ一時辨償ノ猶豫ヲ得ルノ云ヒニシテ決シテ辨償ヲ免除ゼラルヽニアラサルナリ

第二　訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

此保證免除ハ本法第八十八條ニ定ムル保證ヲ指稱スルモノナリ

第三　送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

此外必要ナル場合ニ於テハ申立ニ依リ又裁判所ノ職權ヲ以テ無報酬ニテ辨護士ノ附添ヲ命令スルコトヲ得ヘシ

第一裁判費用ハ既往ノ未納分及ヒ將來ニ生スル裁判費用ヲ云フモノナリ

〔參照〕

獨　第百七條　受救權ノ許可ヲ受ルニ依リ其原被告ハ左ノ權利ヲ得ルモノトス

第一　官吏ノ手數料、證人及鑑定人ニ與フヘキ報酬及其

他ノ現金立替並ニ印紙稅ヲ併セ未納ノ裁判費用及將來ニ生スル裁判費用ノ支拂ヲ一時免除セラルヽコト

第二　訴訟費用ニ付テノ保證ヲ免除セラルヽコト

第三　送達及執行處分ヲ一時無報酬ニテナサシムル爲メ裁判所使吏ヲ付セシメラルヽソ權及代言人ヲ以テ代理セシムルコトヲ要スル場合ニ限リ一時無報酬ニテ其權利ヲ行ハシムル爲メ代言人ヲ付セシメラルヽノ權

第九十八條　訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及ホサス

〔解義〕

本條ハ費用辨償ノ義務ニ關スルコトニ付示定セリ

本條ハ費用ノ最終ノ結算ニ付本法第八十四條以下ノ規則ニ依リ無資力者ヨリ對手人ニ辨償ス可キ費用ニ關シテ規定シタルモノナリ即チ訴訟上ノ救助ヲ受クルト雖モ決シテ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スルノ義務ヲ免ル能ハス故ニ訴訟上曲者ノ言渡ヲ受クルトキハ費用ノ辨償ヲ爲サヽル可ラサルナリ

〔參照〕

獨　第百八條　受救權ヲ受ルノ許可ハ對手ニ生スル費用ヲ辨償スルノ義務ヲ變更セサルモノトス

第九十九條　救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟清ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上

訴ノ取下、抛棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手數料及モ立替金ヲ取立ツルコトヲ得

〔解義〕

本條ハ訴訟救助ヲ受ケタル者ノ對手人ヨリ費用ヲ辨償ス可キ場合ヲ示定セリ

訴訟救助ヲ受ケタル者ノ對手人訴訟費用ヲ辨償ス可キ判決ヲ言渡サレ其判決確定シタルトキハ自己及ヒ救助ヲ受ケタルモノヽ爲ニ生シ且假免除ニ係リタル裁判所費用ハ該對手人ヨリ取立ツ可キモノトス又救助ヲ受ケタル者ノ對手人ニシテ訴若クハ上訴ヲ取下、抛棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キトキハ同シク該對手人ヨリ取立ツルモノトス

又救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ救助ヲ受ケタル者ノ對手人敗訴ノ判決ヲ言渡サレ其言渡確定シタルトキ又對手人ニシテ訴若クハ上訴ヲ取下、抛棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キトキハ該相手人ヨリ其手數料及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得ヘシ

本條第二項ハ執達吏又ハ辯護士ノ爲メ一ノ保護ヲ與ヘタルモノナリ故ニ執達吏又ハ辯護士ニ於テ寧ロ無資力ナル本人ニ掛リ請求スルノ便利ナリトスルトキハ固ヨリ之ヲ訴フルコトヲ得ヘシ即チ本條第二項ニ於テハ末尾ニ得ノ字ヲ加ヘテ

此權利アルコトヲ示定セリ

〔參照〕

獨　第百十四條　貧困ナル原被告ノ一時支拂ヲ免除セラレタル裁判費用ハ未納裁判費用徵收規則ニ從ヒ訴訟費用辨償ノ言渡ヲ受ケタル對手ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

貧困ナル原被告一方ノ對手ノ一時支拂ヲ免除セラレタル裁判費用ハ其對手ヨリ之ヲ取立ツヘキモノトス但其對手訴訟費用辨償ノ言渡ヲ受ケ又ハ其費用ニ付キ判決ナクシテ訴訟ヲ終結シタルトキニ限ル

同　第百十五條　貧困ナル原被告ニ付セラレタル裁判所使吏及代言人ハ其手數料及立替金ヲ訴訟費用辨償ノ言渡ヲ受ケタル對手ヨリ徵收スルノ權アルモノトス

貧困ナル原被告ノ身上ヨリ生スル辨駁ハ同一ノ訴訟ニ於テ其費用ニ付キ言渡サレタル裁決ニ依リ貧困ナル原被告ノ辨償スヘキ費用ノ差引計算ヲ求ル場合ニ限リ之ヲナスコトヲ得

第百條　救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額(第九十七條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ

〔解義〕

本條ハ假免除ノ費用ヲ追償スルコトニ付キ示定セリ

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假

免除ヲ得タル數額ヲ追償セサル可ラス

抑裁判所ニ於テ一旦假免除ノ認許ヲ與ヘタルトキハ訴訟中救助ヲ受ケタル要件存セサルカ或ハ消滅セシカ(本法第九十五條)又ハ本人死亡センカ(本法第九十六條)ニ因リ假免除ノ消滅セサル限リ依然効力ヲ保持ス可キハ明カナリ加之假令輕忽ニ爲シタル訴訟ナリトシテ認許ヲ取消サルヽト雖モ既往ノ費用ニハ更ニ追及スヘカラサルナリ

然ルニ濟清シ得ヘキ資産ヲ生シタルトキハ特リ將來ノミナラス既往ノ費用マテモ追償セサル可ラサルナリ

右ノ如ク本法第九十五條第九十六條ハ將來ノ費用ニ付假免除ヲ許サルヽノ効力アルニ過キサルヲ以テ既往ニ溯リ之ヲ追償スルニハ特ニ本條ノ設ケアラサル可ラサルナリ

〔參照〕

獨　第百十六條　受救權ヲ許サレタル原被告ハ自己及其家族ノ爲メ必要ナル生計ヲ害スルコトナクシテ辨償スルコトヲ得ヘキトキハ一時支拂ヲ免除セラレシ額ヲ直ニ辨償スルノ義務アルモノトス

對手ノ一時支拂ヲ免除セラレシ額ニ付テハ貧困ナル原被告訴訟費用辨償ノ言渡ヲ受ケタルトキニ限リ前項同一ナリトス

第百一條　裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與竝ニ辨護士附添ノ命令ニ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕〔理由〕本條ハ救助ノ認否ニ付テノ手續ヲ示定セリ

裁判所ハ救助ノ付與竝ニ辨護士附添ノ命令ニ付テノ申請、救助ノ取消及ヒ追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲スニハ豫メ檢事ノ意見ヲ聽クコトヲ要ス又決定ヲ爲スニハ口頭辯論ヲ須ヒサルコトヲ得ヘシ

救助ヲ與フルト否又辨護士附添ヲ命スルノ必要アリヤ否ニ至テハ尤モ受救者ノ保護上ニ關係セル大ナルヲ以テ常ニ裁判所ニ於テ公益ノ監察ヲ掌ル檢事ノ意見ヲ聽クコトヲ必要トセルモノナリ又是等ノ申請ヲ認否スルコト追拂ヲ命スルコトニ至テハ偏ニ裁判所ノ意見ニ在ル可キヲ以テ敢テ口頭對審ヲ經ルヲ要セサルモノトス

〔參照〕

獨逸第百十七條受救權ノ許可ヲ受クルノ申立、受救權取上及受救權ヲ許サレタル原被告又ハ對手ノ一時支拂ヲ免除セラレタル額ノ後拂義務ニ付テハ豫メ口頭上ノ審問ナクシテ之ヲ裁決スルコトヲ得

第百二十條　訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限リ抗告ヲ爲スコトヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ

又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕

本條ハ救助ニ關スル決定ニ對シ上訴ヲ許否スル場合ヲ示定セリ

救助ヲ付與シ又ハ救助ノ取消ヲ拒絶シ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒絶スル決定ニ對シテハ檢事ノ外抗告ヲ爲スコトヲ得ス何トナレハ對手人ニ在テハ敢テ之カ抗告ヲ爲ス可キ利益ヲ有セサレハナリ

辨護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ許サス何トナレハ辨護士ノ附添ヲ命スルト雖ヒ對手人ニ於テ之カ上訴ヲ爲ス可キ理由ナケレハナリ又附添ヲ命セラレタル辨護士ハ其命ニ應スルノ義務アルコトハ辨護士ニ關スル特別規則ニ規定セラル可キナリ

救助ノ申請ヲ拒絶シ若クハ救助ヲ取消シ又ハ辨護士附添ノ申請ヲ拒絶シ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ニ於テ抗告ヲ爲シ得ヘキナリ

〔參照〕

獨　第百十八條　受救權ヲ許可スル決議ニ對シテハ上訴ヲナスコトヲ許サス受救權ヲ拒絶シ又ハ取上又ハ費用ノ後拂ヲ命スル決議ニ對シテハ故障ヲ申立ルコトヲ得

第三章　訴訟手續

第一節　口頭辯論及ヒ準備書面

第百三條　判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕

本條ハ訴訟ノ辯論ハ一般ニ口頭ニ依ル可シトノ原則ヲ示定セリ

本條ハ舊慣ヲ改正セシ最モ著明ノ點ナリ即チ訴訟ニ付テノ辯論ハ此法律ニ於テ例外ヲ示サヽル以上ハ總テ口頭ニ因ル可シトセリ故ニ舊慣ノ如ク書面ヲ以テ辯論ヲ戰ハシ或ハ書面口頭兩ナカラ之ヲ用ユルカ如キヲ許サヽルモノトス

然レ𪜈當初ヨリ直チニ口頭審理ヲ開ク能ハス之カ訴答ヲ爲スニ當リ自ラ一定ノ順席規律ナカル可ラス即チ本法ニ於テハ先ツ暫ラク書面ヲ以テ口頭辯論ヲ準備ス可キコトヽセリ

本條口頭辯論ヲ採用シタル法制ヨリ左ノ如キ効果ヲ生ス

第一　準備書面ニ掲ケサルコトヽ雖𪜈口頭審理ノ際之ヲ陳述セシ𪜈ハ總テ之レヲ參酌採用セサル可ラス

第二　準備書面ニ掲クルト雖𪜈口頭審理ノ際之ヲ陳述セサル𪜈ハ決シテ參酌採用スルヲ得ス

以上口頭審理ノ主義トスル所裁判官ハ親ク聽聞スル所ニ限リ採用ス可シト云フニ在リ而シテ此主義ヨリ又左ノ効果ヲ生ス審理ノ席ニ蒞ミタル裁判官ノ外判決ヲ爲ス可ラサルヿリ若シ裁判官更迭シタルトキハ必ス更ニ口頭審理ヲ開カサル可ラス

〔參照〕

獨　第百十九條　判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ審問ハ口頭上審問ナリトス

第百四條　口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第百五條　準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一　當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁判所、訴訟物及ヒ附屬書類ノ表示

第二　原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立

第三　申立ノ原因タル事實上ノ關係

第四　相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述

第五　原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻擊ノ爲メ用ヰントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述

第六　原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印

第七　年月日

第百六條　準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ之ヲ記載ス可シ

此他事實上ノ關係ノ說明竝ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲クルコトヲ得ス

〔解義〕

第百四條ハ口頭辯論ハ書面ヲ以テ準備ス可キコトヲ示定シ

第百五條ハ準備書面ノ條件ヲ示定シ第百六條ハ準備書面ノ

記載方法ヲ示定セリ

第百四條ハ[illegible]

口頭辨論ハ書面ヲ以テ準備セサル可ラス

故ニ口頭ニテ起訴シ或ハ控訴スルモ其効ナカルヘキナリ又訴訟ノ變更ニ付テモ口頭ノ申立ハ其効力ヲ生セサル可シ(本法第百九十五條第四百十三條)

又準備書面タル訴狀反訴狀等ヲ交付スル爲メ送達スル片ハ本法第百九十五條ノ効力ヲ生スル而已ナラス期滿免除ヲ中斷シ得ヘシ[illegible]

然レ𪜈區裁判所ニ訴フル片ハ必ス書面ヲ用ヒサルモ口頭ヲ以テモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ又一定ノ裁判期日ニハ豫メ期日ノ指定ナクシテ直ニ裁判所ニ口頭ニテ辨論ヲ爲スコトヲ得ヘシ(本法第三百七十四條第三百七十八條)

第百五條

本法ハ素ト訓諭法ニシテ頗ル口頭審理ノ準備ヲ爲ス目的ニ適當セリ乃チ能ク本條ノ規則ヲ遵奉シ且本法ニ規定スル所ニ依テ其書面ノ送達ヲ適當ノ時期ニ於テ爲ス片ハ原被告ハ攻擊又ハ辨護ノ準備整頓シテ速ニ口頭審理ヲ開キ得ヘキナリ又是カ爲メ完全ナル審理ノ進行ヲ迅速ナラシメ且準備書面ノ謄本ハ對審前受訴裁判所ノ書記局ニ出シ置カサル可ラサルヲ以テ(本法第百八條)更ニ手續上適當ノ指揮ヲ爲スニ付便利ヲ與フ可キナリ

本條列記セル事項ハ一讀明了ニシテ別ニ解釋ヲ要セス

第百六條[illegible]

本條準備書面ニハ事實ヲ簡明ニ記載ス可シトシ又事實上ノ關係ハ說明竝ニ法律上ノ討論ハ之ヲ揭グルヲ得ストセシハ能ク準備書面ノ性質ヲ明示スルニ足ル可シ素ト準備書面ハ口頭ヲ準備スルニ過ギサルヲ以テ若シ其書面中ニ事實ノ景況ニ關スル所之ヲ詳擧シテ其要否ヲ擇フヿナク而シテ又其關係ノ要旨ヲ簡約ニ抄出スルナクシテ精細冗長ニ論述シ且法律上ノ論辨ヲ喋々シテ更ニ煩雜ナラシムルニ至テハ即チ立法者ノ企圖セル豫希ニ戻リ反テ其主義トスル所ヲ謬ルニ陷ル可キナリ

〔辨疑〕

第百五條ニ列記セル事項ヲ遺漏セシヿ如何ナル効果ヲ生ス可キヤ曰ク第百五條ハ一ノ訓諭法ニシテ彼ノ本法第百九十條第四百一條第四百三十八條ノ如ク制限セルモノト異ナルヲ以テ假令遺漏スルヿアルモ其書面ノ無効ニ非ラサルノ趣旨ナル可シ本法第二百二十三條ニ於テ書面上ノ遺漏ヲ追正シ得ルニ依ルモ自ラ知了セラル可キナリ

然レ𪜈準備書面ノ不十分ナル爲メ口頭審理ヲ變更シ若クハ期日ニ至テ延期シ又ハ後ノ期日ヲ定メ之ヲ繼續スルニ至ラシムル𪜈ハ之ヨリ生シタル費用ヲ負擔セサル可ラス

〔參照〕

獨　第百二十條　口頭上審問ハ代言訴訟ニ於テハ書面ヲ以テ之ヲ準備スルモノトス此規定ヲ遵守セサルモ事件ニ關シ權利上損害ヲ受ルヨリ其他ノ訴訟ニ於テハ準備書面ヲ交換スルヿトヲ得

同　第百二十一條　準備書面ニハ左ノ件々ヲ記載スヘシ

第一　原被告及其法律上代人ノ氏名身分又ハ職業住所及原被告タルノ資格裁判所及訴訟事件並ニ附屬書類ノ員數

第二　原被告法廷ニ於テナサントスル申立

第三　申立ノ理由トナル事實上ノ關係

第四　對手ノ事實上主唱ニ付テノ陳述

第五　原被告ニ於テ事實上主唱ノ證明又ハ駁斥ニ供セントスル證據物並ニ對手ノ記載シタル證據物ニ付テノ陳述

第六　代言訴訟ニ於テハ代言人ノ署名其他ノ訴訟ニ於テハ原被告本人又ハ之ニ代テ訴訟代人又ハ業務擔當者トナリ委任ナクシテ處置スル者ノ署名

第百七條　準備書面ニハ訴訟ヲ爲スヘキ資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附スヘシ

證書ノ一部分ノミヲ要用トスルトキハ其冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル

證書カ既ニ相手方ニ知レタルトキ又ハ大部ナルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閲覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第百八條　當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類竝ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

〔解義〕〔理由〕

第百七條ハ證書ノ謄本ヲ提出スルコトニ關シ第百八條ハ準備書面ノ謄本ヲ裁判所ニ呈出スルコトニ付キ示定セリ

第百七條

原被告ノ手裏ニ存在スル證書ニシテ且申立ノ證明ノ爲メ引用セル片ハ其證書ノ謄本ヲ準備書面ニ添附セサル可ラス然レ𪜈證書ノ一部分ヲ引證スル片ハ其全部ノ謄本ヲ以テセス𪜈其冒頭、引用ノ部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添付スルヲ以テ足レリトス又引用セル證書ノ相手方ニ知レタルトキ又浩瀚ニシテ容易ニ謄寫スル能ハサル片ハ相手方ニ閲覽セシメント欲スル旨ヲ附記スレハ可ナリ

蓋シ原被告ハ審理期日前ニ證書ノ條件ヲ知了セル片ハ口頭審理ニ於テ提出スル證書ニ對シ辨護スルノ準備ヲ爲シ得又審理期日前ニ證書ノ閲覽ヲ請求シ得ヘキ場合ニ於テハ其之ヲ提出シタル時直ニ該證ノ眞否ニ付説明シ得ルナリ即チ本條ハ審理ヲ迅速ナラシムルニ切要ナル規則ナリトス

原被告其書面中ニ引用スル證書ニシテ自己ノ掌裏ニ存在スルモノヲ提出スルヲ肯セサル片ハ相手人ハ其辨明ヲ爲スヿヲ拒ミ其他一方ノ費用ヲ以テ期日ノ更定ヲ請求スルノ權アリ若シ又其證書ヲ本案終局判決アルマテ提出セスシテ止ム

時ハ則其立證方法ハ自ラ滅却スルナリ

然レ𪜈證書及ヒ爲替ニ關スル訴訟ニテハ必ス初メヨリ證書ノ原本又ハ謄本ヲ添ヘテ提出セサル可ラス(本法第四百八十五條)

又對手人自己ノ立證ノ爲メ又ハ反對立證ノ爲メ他人ノ所持スル證書ヲ提出セシメント欲スル𪜈ハ本法第三百三十五條以下ノ手續ニ依ラサル可ラサルナリ

第百八條

本條準備書面及ヒ其附屬書類竝ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出サシムル所以ノモノハ亦裁判所ヲシテ準備ヲ爲シ得セシメ乃チ審理ニ付キテ適當ノ處理ヲ稽留セシメサルノ準備ヲ爲シ得ルニ在リ

〔分析〕

第百七條ノ規則ハ二箇ノ條件ヲ要ス

第一　原被告其訴訟中ニ引用スル證書ナルヿ

第二　證書ノ原被告ノ手裏ニ現在セルヿ

〔參照〕

獨　第百二十二條　準備書面ニハ原被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ其書面ニ引用スルモノヽ原本又ハ謄本ヲ添フヘキモノトス

證書ノ一部ノミヲ要スルトキハ其抜書ヲ添フルヲ以テ足レリトス其抜書ニハ證書ノ冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附及ヒ署名ヲ載スヘシ

對手ニ於テ既ニ證書ヲ知了スルトキ又ハ其證書ノ大部ナ

ルトキハ之ヲ詳記シ其展覽ヲ許スノ申込ヲナスヲ以テ足レリトス

同　第百二十四條　原被告ハ其準備書面及附屬書類ニシテ訴訟裁判所ニ差出スヘキ謄本ヲ裁判所書記局ニ納付スヘキモノトス

此納付ハ裁判期日ヲ定ムヘキトキ又ハ裁判所書記ヲ經テ送達ヲナスヘキトキハ原本ノ呈出ト同時ニ之ヲナシ其他ノ場合ニアリテハ準備書面ノ送達ヲナシタル後直ニ之ヲナスモノトス

第百九條　裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス」

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル說明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯論ノ終了スルコトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直チニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル說明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決竝ニ決定ヲ言渡ス

第百十條　口頭辨論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因リテ始マル

當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ援用スルコトヲ許サス文字上ノ旨趣ヲ要用トスルトキハ其要用ナル部

分ニ限リ之ヲ朗讀スルコトヲ得

三百八

〔解義〕〔理由〕

本兩條ハ口頭審理ノ本體ニ關スル制規ニ付示定セリ

第百九條

裁判長ハ口頭辨論ノ準備整フタルトキハ其期日ニ於テ訴廷ニ蒞ミ口頭辨論ヲ開始シ且辨論ノ順序等ニ付之ヲ指揮スルモノトス

期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マルモノトス(本法第百六十三條)即チ期日當事者ヲ訴廷ニ呼入レ口頭辨論ヲ開始スルモノナリ

本條ハ固ヨリ區裁判所ニモ適用スルヲ以テ裁判長ノ語穩ナラサルカ如キモ區裁判所ニテハ區裁判官ヲ指ス義ト解釋セサル可ラス

裁判長ハ當事者ニ發言ヲ許シ又其命令ヲ奉セサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ當事者ヲシテ辨論ヲ盡サシメ且間斷ナク辨論ヲ完結スルコトヲ努メサル可ラス又必要ノ場合ニ於テハ直チニ口頭審理繼續ノ爲メ後ノ期日ヲ定ムルモノトス

又裁判所ニ於テ事件ニ付辨論全ク盡キタリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辨論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ言渡スモノトス

裁判所ニ於テトアリ抑裁判ハ裁判所之ヲ爲スモノニシテ裁判長ハ畢竟之カ機關ニ供セラルヽニ過キス故ニ辨論カ裁判ヲ爲スニ熟シタルヤ否ハ裁判所ニ於テ之ヲ決スルモノト爲

三百九

サヽル可ラス裁判長陪席裁判官等ニ於テ之ヲ審理結了スルハ即チ裁判所カ審理結了スルノ道理ニ歸スル者トス又一旦口頭辨論ヲ閉チタル後ト雖ヒ若シ取調不十分ト認ムル片ハ之カ再開ヲ命スルコトヲ得ヘシ(本法第百二十四條)

裁判所ニ於テ判決決定ヲ爲スニハ會議室ニ於テスルモノニシテ是ニ關スル要件ハ裁判所構成法ニ規定セリ然レヒ事件ノ簡易ナル片ハ訟廷ニ於テ密議シ即時ニ之ヲ言渡スコトヲ得ヘシ

又裁判長ハ訟廷内ノ靜肅及ヒ秩序ヲ保持セシムルノ權アルモノニシテ同シク裁判所構成法ニ規定セリ

又訟廷ニ於テノ辨論ハ一般國語ヲ以テス可キモノニシテ又當事者ノ外國人タル片若クハ啞者等ニシテ言語ノ通セサルヒハ之ニ通事ヲ付スルヿアリ此等ニ關シテモ裁判所構成法ニ現定セリ

〔參考〕

裁判所構成法

第百四條　訴訟審問ノ上席及指揮ハ合議裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル裁判長ニ屬シ區裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル判事ニ屬ス

裁判長ニ屬スル權ハ裁判上一人ニテ執務スル判事ニモ亦屬ス

第百五條　裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ其ノ決議ハ其理由ト共ニ公衆ヲ退カシムル前之ヲ言渡ス此場合ニ於テ裁判所ノ判決ヲ言渡ストキハ再

ヒ公衆ヲ入廷セシムヘシ

第百六條　裁判長ハ公開ヲ停メタルトキモ入廷ノ特許ヲ與フルコトヲ至當ト認ムル者ヲ入廷セシムルノ權ヲ有ス

第百七條　裁判長ハ婦女兒童及相當ナル衣服ヲ着セサル者ヲ法廷ヨリ退カシムルコトヲ得其ノ理由ハ之ヲ訴訟ノ記錄ニ記入ス

第百八條　開廷中秩序ノ維持ハ裁判長ニ屬ス

第百九條　裁判長ハ審問ヲ妨クル者又ハ不當ノ行狀ヲ爲ス者ヲ法廷ヨリ退カシムルノ權ヲ有ス

前項ニ揭タル違犯者ノ行狀ニ因リ之ヲ拘引シ閉廷ノトキマテ之ヲ拘留スルノ必要アリト認ムルトキ裁判長ハ之ヲ命令スルノ權ヲ有ス閉廷ノトキ裁判所ハ之ヲ釋放スルコトヲ命シ又ハ五圓以下ノ罰金若ハ五日以內ノ拘留ニ處スルコトヲ得

此處罰ニ對シテハ上告ヲ許シ控訴ヲ許サス且其ノ所爲ノ輕罪若ハ重罪ニ該ルヘキモノナルトキハ之ニ對シテ刑事訴追ヲ爲スコトヲ得

第百十條　前條ノ規定ハ左ノ變更ヲ以テ當事者證人及鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス

第一　裁判所ハ閉廷ヲ待タスシテ本條ノ違犯者ヲ即時ニ罰スルコトヲ得

第二　違犯者原告ナルトキハ裁判所ハ處罰ノ上仍本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルマテ其ノ審問ヲ中止スルコトヲ得

第百十一條　裁判長ハ不當ノ言語ヲ用ヰル辨護士ニ對シ同事件ニ付引續キ陳述スルノ權ヲ行フコトヲ禁スルコトヲ得其禁止ハ此行狀ニ付懲戒上ノ訴追ヲ爲スコトヲ妨ケス

第百十二條　裁判所ノ開廷中秩序ヲ維持スル爲第百九條第百十條及第百十一條ヲ以テ與ヘタル權ハ豫審判事又ハ受命判事又ハ法律ニ從ヒ其ノ職務ヲ行フ試補モ又之ヲ行フコトヲ得

此ノ場合ニ於テノ異議ハ二十四時以內ニ其ノ判事又ハ試補ニ之ヲ申出ルコトヲ得

豫審判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ノ屬スル裁判所ノ刑事部若ハ刑事支部ニ於テ前項ノ異議ヲ裁判ス受命判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ニ命シタル裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第百十三條　第百九條第百十條第百十一條及第百十二條ヲ以テ與ヘタル權ヲ行ヒタルトキハ訴訟ノ記錄ニ之ヲ記入シ及其ノ理由ヲ記ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ所爲ノ重罪若ハ輕罪ニ該ルヘキモノナルカ又ハ懲戒上罰スヘキモノナルトキハ詳細ニ之ヲ記入シ裁判長ハ其事件ヲ更ニ處分スルノ權アル官廳ニ報告ヲ爲ス

第百十五條　裁判所ニ於テハ日本語ヲ用ウ

當事者證人又ハ鑑定人ノ中日本語ニ通セサル者アルトキハ訴訟法又ハ特別法ニ通事ヲ用ヰルコトヲ要スル場合ニ

於テ之ヲ用ウ

第百十六條　通事ノ任命及使用並ニ訴訟手續上其ノ行フヘキ職務ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百十七條　通事ノ得難キ場合ニ於テ書記其言語ニ通スルトキハ裁判長ノ承諾ヲ得テ通事ニ用ヰラルヽコトヲ得

第百十八條　外國人ノ當事者タル訴訟ニ關係ヲ有スル者及其ノ訴訟ノ審問ニ參與スル官吏ノ或ル外國語ニ通スル場合ニ於テ裁判長便利ト認ムルトキハ其外國語ヲ以テ口頭審問ヲ爲スコトヲ得但シ其審問ノ公正記錄ハ日本語ヲ以テ之ヲ作ル

第百十九條　合議裁判所ノ裁判ハ此ノ法律ニ從ヒ定數ノ判事之ヲ評議シ及之ヲ言渡ス

第百二十一條　判事ノ評議ハ之ヲ公行セス但シ豫備判事及試補ノ傍聽ヲ許スコトヲ得

判事ノ評議ハ其裁判長之ヲ開キ且之ヲ整理ス其ノ評議ノ顚末並ニ各判事ノ意見及多少ノ數ニ付テハ嚴ニ秘密ヲ守ルコトヲ要ス

第百二十二條　評議ノ際各判事意見ヲ述フルノ順序ハ官等ノ最モ低キ者ヲ始トシ裁判長ヲ終トス

官等同キトキハ年少ノ者ヲ始トシ受命ノ事件ニ付テハ受命判事ヲ始トス

第百二十三條　裁判ハ過半數ノ意見ニ依ル

金額ニ付判事ノ意見三說以上ニ分レ其ノ說各々過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次

寡額ニ合算ス

刑事ニ付其ノ意見三説以上ニ分レ各々過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第百二十四條　判事ハ裁判スヘキ問題ニ付自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムコトヲ得ス

第百十條

裁判長カ口頭審理ヲ開タル後當事者ハ先ツ互ニ其要旨ニ付申立ヲ爲シ即チ裁判所ハ其訴旨ノ申立ニ依リ切要ノ點ヲ知了シタル後當事者ハ該申立ニ付キ理由ヲ付スルカ爲メ陳述スルモノトス(本法第二百二十二條陳述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ付キ訴訟ノ關係ヲ明瞭ニスルヲ以テ目的トシ且任意ニ之ヲ爲スヘキモノトス

口頭ニテ爲ス陳述ニ代フルニ準備書面ヲ朗讀シ若クハ其陳述ヲ爲サスシテ之ヲ準備書面ニ讓ルヿヲ得ス然レ𪜈文字上ノ趣旨ヲ要用トスルトキハ其部分タケ之ヲ朗讀スルコトヲ得ヘシ

若シ口頭陳述ニ代ヘ書面ヲ朗讀シ又口頭陳述ヲ書面ニ讓ルヿハ口頭審理本然ノ原則ニ背戻スルノミナラス遂ニ審理ハ書面上ノ審理ト變スルニ至ラン抑口頭ニ代テ書面ノ朗讀ヲ爲スヿノ敢テ許ス可ラサルハ口頭審理ノ原則ニヨリ自然ニ生スル結果ナリト雖𪜈立法者特ニ本條第三項ヲ設ケタルハ口頭審理ノ主義ニ付テ更ニ疑惑ヲ起サヽラシメンカ爲メナリ

〔參照〕

猶　第百二十七條　裁判長ハ口頭上審問ヲ開始シ及ヒ指揮スルモノトス

裁判長ハ發言ヲ許シ及其命令ニ從ハサル者ニ對シ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付テノ辨論ヲ盡スコト及間斷ナク審問ヲ終ルコトニ注意ス可キモノトス必要ナル場合ニ於テハ審問ヲ繼續スル爲メ直ニ開廷日ヲ定ムヘシ

裁判長ハ裁判所ノ見込ニ依リ事件ニ付充分辨論シタリト認ルトキ審問ヲ終結シ及裁判所ノ判決及決議ヲ言渡スモノトス

同　第百二十八條　口頭上審問ハ原被告其申立ヲナスヲ以テ始マルモノトス

原被告ノ供述ハ言語ヲ以テ之ヲナシ事實上及法律上ニ於ケル訴訟關係ヲ包含スヘキモノトス

口頭上審問ニ換ヘテ書面ヲ引用スルコトハ之ヲ許サス書面ノ朗讀ハ其文字上主旨ノ必要ナルトキニ限リ之ヲ許スモノトス

代言訴訟ニ於テハ代言人ノ外原被告本人モ亦申立ニ依リ發言ヲ許サルヘキモノトス

第百十一條　各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思カ顯ハレサルトキ

ハ自白シタルモノト看做ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實驗シタルモノニモ非サル事實ニ限リ之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス

〔解義〕

本條ハ辨明ノ責務及ヒ權利ノ毀損ニ付示定セリ

原被告ノ一方ヨリ主張スル事實ニ付テハ他ノ一方ニ於テ辨明セサル可ラサルナリ而シテ其一般ニ亘リテ爲シタル抗辨ハ果シテ十分ノ効力アリヤ否ニ至テハ各場合ニ於テ裁判所ノ取捨判斷ニ任スヘキナリ

事實ニ付確然辨明ヲ爲サス且原被告ノ他ノ辨明ニ於テ之ヲ抗爭セントスル意思ノ顯ハレサルトキハ則チ之ヲ自認シタルモノト看做ス可キナリ反之他ノ辨明ニ於テハ之ヲ抗爭セント欲スル意思ナルヿヲ見ルヘキトキハ則其事實ニ對シ抗爭スルモノト爲ス可キナリ而シテ又本來ノ審理期日ヨリ更ニ多數ノ期日ニ亘ル虞アルトキハ渾テ之ヲ一個ノ審理ト認ムヘキ原則ナルニ依リ新ニ期日ヲ指定シ或ハ更ニ審理ヲ開クコトヲ爲ス間何時ニテモ抗爭セサル事實ニ付抗爭ヲ爲シ得ヘシ然レトモ時機ヲ失シテ抗爭シ爲メニ訴訟ヲシテ延滯ニ至ラシムルトキハ訴訟費用ノ全部又ハ幾部ヲ科セラルヽヿアル可キナリ

原被告カ自己ノ行爲ニ非ラサル事實又ハ親驗セサル事實ニ付テハ之ヲ知了セスト答フルヲ得ヘシ乃チ此時ハ抗爭シタルモノト看做スヘキモノトス例ヘハ他人ノ行爲又ハ先人ノ

生前中結ヒタル契約ニシテ親驗セサル片之ヲ知了セスト答フルカ如シ

若シ一朝己ノ怠ニ依リ自認ト看做サレタルトキハ種々ノ効果ヲ生シ得ヘシ本法第百七十三條第三百五十一條第四百十七條第四百十八條等ニ定ムルモノ之ナリ

又自認ハ民法上尤モ有力ナル證據ニシテ事實上ノ錯誤ニアラサルヨリハ之ヲ取消スコトヲ得ス(民法證據篇第三十六條)

〔參照〕

獨　第百二十九條　各原被告ハ對手ノ主唱シタル事實ニ付陳述ヲナスヘキモノトス

明ニ不服ヲ受ケサル事實ハ之ニ對シ不服ヲ申立ントスルノ主旨原被告ノ其他ノ陳述ニ依リ判然セサルトキ之ヲ承諾シタルモノト看做スヘキモノトス

知了セスト言ヘル陳述ハ原被告ノ自己ノ行爲及其實驗シタル事件ニアラサル事實ニ付テノミ之ヲナスコトヲ許スモノトス

第百十二條　裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存スルトキハ其疑ニ付注意ヲ爲スコトヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得ス然レトモ其問ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

若シ其問ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルトキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得

〔解義〕〔理由〕

本條ハ裁判長ノ質問權ニ付示定セリ

抑裁判所ノ機關タル裁判長ハ審理スル原被告ニ對シテ緘默冷淡只々聽聞者トシテ安坐スヘキニ非ラス必ス其審理ヲ提督シ之ヲ發達セシメ又時トシテハ審理原則ノ範圍內ニ於テ之ヲ翼賛スルヿアルヘシ乃其事件ノ蘊奥ヲ盡シ審理ヲ中止

スルナク之ヲ結了スルニ至ルヿヲ努メ必要ナル場合ニハ復タ審理繼續ノ爲メ直チニ訟廷ノ再開ヲ指定ス可キナリ本條ハ復タ事件ノ蘊奥ヲ盡サシムルノ方法トシテ裁判長ニ質問權ヲ付與セリ

裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起サヽル疑ノ存スルトキ其疑ニ付注意セシムルコトヲ得ヘシ

職權上調査ス可キ點トハ訴訟能力ノ適否、法律上代理權ノ當否、本人訴訟ニ於テ訴訟代理權ノ適否ノ類ヲ云フ

裁判長ハ當事者ノ申立ニシテ不明瞭ナル片ハ之ヲ釋明セシメ又當事者ノ主張セル事實ニシテ其證明不十分ナリト思料スル片ハ之ヲ補充シ及ヒ立證方法ヲ指定セシメ其他事件ノ關係ヲ確定スルニ切要ナル各辨明ハ之ヲ爲サシメサル可ラ

ス

陳述ヲ爲サシムル可シトアリ故ニ此等ノ質問ヲ爲スハ特ニ裁判長ノ權利ノミナラス又之カ義務アルモノトス實ニ口頭審理ノ効用ハ寛優ニシテ且機敏ニ果達スル裁判官ヲ俟テ初メテ完全ヲ得ヘキモノナリ

右質問權ハ特リ裁判長ニ屬スル而已ナラス陪席判事モ亦之ヲ爲スコトヲ得ヘシ然レ𪜈訟廷ノ審問ハ裁判長ニ於テ之ヲ爲スヲ普通ノ原則トナスト且審理ノ亂雜ニ至ルノ恐レアルヲ以テ一應裁判長ニ告ケタル上質問ニ取掛ラサル可ラス

又當事者モ相手方ニ對シ質問スルコトヲ得ヘシ然レ𪜈相互ニ問答スル𪜈ハ訟廷ノ規律ヲ亂スニ至ルヲ以テ裁判長ニ對シ之カ質問ヲ求メサル可ラス

當事者ニシテ裁判長陪席判事若クハ相手方ノ問ニ對シテ答辨セス又ハ確答セサル𪜈ハ相手方ノ利益トナル可キ答ヲ爲シタルモノト看做サルヽモノトス即チ答辨ヲ怠ル𪜈ハ前條第二項ノ處分ヲ受ケ又立證方法ニ付之カ指定ヲ爲サヽル𪜈ハ無證左ノモノト決セラル可キナリ

〔參照〕

獨　第百三十條　裁判長ハ問ヲ付シテ不明瞭ナル申立ヲ明瞭ナラシメ申立テタル事實ノ不充分ナル點ヲ補充シ及證據物ヲ指定セシムル等總テ事件ノ關係ヲ確定スル爲メ重要ナル陳述ヲナサシムヘキモノトス

裁判長ハ職權ヲ以テ注意スヘキ點ニ付テ存スル不完全ニ注意セシムヘキモノトス

裁判長ハ求メニ依リ裁判所各職員ニ問ヲ付スルコトヲ許スヘキモノトス

第百十三條　事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ヲ爲ス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ辯論ニ與カル者ニ於テ命令及ヒ質問ヲ否拒スル場合ニ付キ示定セリ

事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命即チ審理期日ニ於ケル裁判長ノ指揮又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル質問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所ハ之カ裁判ヲ爲サヽル可ラス

裁判所之ヲ裁判スト定メタルハ元裁判長ハ裁判所ノ假定ノ全權者トシテ事件ノ整理ヲ爲スノ權利ヲ施行スルニ過キスシテ固有ノ全權者タルニ非ラス故ニ裁判長ハ其申立ヲ專決ス可ラスト云フノ理由ニ之レ基ケリ

辯論ニ與カル者トハ訴訟人證人鑑定人ヲ云フ

又裁判所ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ爲シ得ヘキナリ

〔參照〕

獨　第百三十一條　事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命令又ハ裁判長又ハ裁判所職員ノ付シタル問ニ對シ審問ニ關係シタル者ヨリ許サレサルモノトシテ異議スルトキハ裁判所

之ヲ裁決スルモノトス

第百十四條　裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕

本條ハ原被告本人ヲ審問スルコトニ付示定セリ

裁判所ハ現實ノ狀況ヲ明瞭ナラシムル爲メ原被告ノ一方又ハ雙方ヲシテ自身ニ出頭セシムルコトヲ得ヘシ

原被告ニ出廷ヲ命スルハ特リ裁判所ニ限リテ裁判長ハ此權ヲ有セス

又裁判所ハ訴訟ノ和解ヲ試ミシムル爲メ受命判事若クハ受托判事ノ面前ニ自身出廷ヲ命スルコトヲ得ヘシ(本法第二百二十一條)

又當事者本人ノ訊問ニ付テハ本法第三百六十條以下ニ規定セリ

〔參照〕

獨　第百三十二條　裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原被告一方本人ノ出廷ヲ命スルコトヲ得

第百十五條　裁判所ハ原告若クハ被告ノ援用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作リタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十六條　裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記錄

ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十七條　裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得

此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ

〔解義〕

第百十五條及ヒ第百十六條ハ裁判所カ證書ノ提出ヲ命シ得ヘキコトヲ示定シ第百十七條ハ裁判所カ檢證及ヒ鑑定人ヲ命シ得ヘキコトヲ示定セリ

裁判所ハ質問權アリト雖ヒ事件ノ關係ヲ更ニ明瞭ナラシムルニ付テハ未タ足ラサル所多シ是レ第百十五條乃至第百十七條ノ設ケアル所以ナリ

第百十五條

裁判所ハ原被告ノ援用シタルモノニシテ且手中ニ存スル證書ニ限リ之カ提出ヲ命スルコトヲ得ヘシ

原被告ノ證左ニ供セス單ニ其陳述ヲ辨明スルニ止マルモノハ之カ提出ヲ命スルヲ得ス

第百十六條

裁判所ハ原被告ノ所持スル訴訟記錄ニシテ事件ノ審理及ヒ裁判ニ關スルモノノ提出ヲ命シ得ヘキナリ

第百十七條

裁判所ハ原被告ノ申立ヲ俟タス自ラ臨檢ヲ果行シ又鑑定人ヲ命スルコトヲ得ヘキナリ

右ハ臨檢鑑定人ヲ命スルニモ通常申立ニ依リ命スル檢證及ヒ鑑定ノ手續ニ從フモノトス

原被告第百十五條第百十六條ニ依テ命スル所ニ從ハサル片ハ種々ノ不利益ナル効果ヲ受ク可シ

〔參照〕

獨　第百三十三條　裁判所ハ原被告ニ對シ其手中ニ存スル證書ニシテ引用シタルモノ並ニ系圖細圖略圖及其他ノ圖面ヲ呈出スヘキコトヲ命スルヲ得

裁判所ハ呈出シタル書類ヲ其定ムヘキ時間中裁判所書記局ニ留置スヘキコトヲ命スルヲ得

裁判所ハ他國語ニテ作リタル證書ニ付テハ宣誓シタル通事ノ作リタル譯書ヲ差出スヘキコトヲ命スルヲ得

同　第百三十四條　裁判所ハ原被告ニ對シ其現有スル書類ヲ差出スヘキコトヲ命スルヲ得但其書類ハ事件ノ審問及裁決ニ關スルモノナルトキニ限ル

同　第百三十五條　裁判所ハ檢證處分並ニ鑑定人ノ鑑定ヲ命スルコトヲ得

其手續ハ申立ニ依リ命シタル檢證處分又ハ鑑定人ノ鑑定ニ關スル規定ニ從フモノトス

第百十八條　裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十九條　同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキハ裁判所ハ

先ツ辯論ヲ其一二ニ制限ス可キヲ命スルコトヲ得

第百二十條　裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノノ辯論及ヒ裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

〔解義〕

第百十八條乃至第百二十條ハ裁判所ニ於テ訴訟ヲ分合スルコトニ付示定セリ

第百十八條

一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲シ得ヘキコトハ本法第四條ニ於テ見タル所ナリ此場合ニ於テ裁判所ハ取調ノ便宜ニ因リ數箇ノ請求ヲ分別シテ審理スルコトヲ命シ得ヘキナリ而シテ本訴ト反訴ニ付テノ辯論モ亦之ヲ分離シテ審理スルコトヲ命シ得ヘシ

而シテ數箇ノ請求中又ハ本訴反訴ノ中其一箇タケ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ一分判決ヲ以テ終局裁判ヲ與フルコトヲ得ヘキナリ(本法第二百二十六條)

然レ𪜈其請求若クハ訴ノ相互ニ關聯シテ分ツ可ラサルトキハ固ヨリ分離セサルヲ可トス

第百十九條

一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻擊若クハ防禦ノ方法ヲ用ユルトキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限ス可キコトヲ命

シ得ヘキナリ

例ヘハ遺産相續ニ關スル訴件ニシテ同時ニ遺言狀相續、契約及ヒ法律上相續ヲ併セテ起スモノアリ此場合ニ於テ裁判所ハ其各原由ニ從フテ該件ヲ分別シテ審理スルコトヲ得ヘシ

第百二十條

又裁判所ハ同時ニ審理及ヒ裁判ヲナス爲メ其裁判所ニ屬スル同一又ハ各別ナル原被告ノ數多ノ訴訟ヲ合同スルコトヲ命シ得ヘキナリ然レ𪜈其訴訟ノ目的物タル請求ハ一箇ノ訴ヲ以テ主張シ得ヘキ時ナラサル可ラス

本法第四十八條ニ定ムル共同訴訟人トシテ訴フルヲ得ヘキ場合ニ於テ各自ニ之ヲ訴フル𪜈ハ即チ之ヲ合併シ得ヘキナリ例ヘハ數多ノ相續人ニ係リ各自ニ訴ヲ起シタル時ノ如キ之ナリ

本條但書ノ條件ナキ𪜈ト雖𪜈之ヲ合併シ得ヘキ場合ハ特リ本法第七百七十六條ニ規定セリ

以上訴訟ヲ分離シ又ハ合併シタル時ハ裁判記錄モ亦之ヲ各冊ニ別ケ又ハ之ヲ一冊ニ合セサル可ラス

又訴件ヲ分離シ合併スルモ毫モ裁判權限上ニ影響ヲ及ホサヽルモノトス

〔參照〕

獨逸第百三十六條　裁判所ハ一訴訟ニ於テ申立テタル數箇ノ請求ヲ分離シタル裁判手續ヲ以テ審問スルコトヲ命ズルヲ得

訴訟ニ於テ申立テタル要求ト權利上ノ連係ヲ有セサル反

對要求ヲ被告ノ申立テタルトキモ亦同シ

同　第百三十七條　裁判所ハ同一ノ請求ニ關スル數箇獨立ノ攻擊方又ハ辯護方(訴訟理由辨駁再辨駁等)ニアリテ先ツ其一又ハ二三ニ限リ審問ヲナスヘキコトヲ命スルヲ得

同　第百三十八條　裁判所ハ同時ニ審問及ヒ裁決ヲナス爲メ同一又ハ各異原被告ノ裁判關係トナリタル數箇訴訟ノ連合ヲ命スルコトヲ得但其訴訟事件トナル請求權利上ノ連係ヲ有シ又ハ一訴訟ニ於テ申立ルコトヲ得ヘキトキニ限ル

第百二十一條　裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判カ他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ

第百二十二條　裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行爲ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但其罰ス可キ行爲カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホストキニ限ル

〔解義〕

本兩條ハ裁判所カ職權ヲ以テ審判ノ中止ヲ命シ得ヘキ場合ヲ示定セリ

第百二十一條

一訴訟ニ付テノ裁判ノ全部若クハ一部ニシテ他ノ訴訟ノ結果即チ權利ノ成立不成立ニ關スル片ハ其訴訟ノ完結スルマテ之ヲ中止セサル可ラス

例ヘハ貸金ノ元金ニ對スル訴ト之レヨリ生スル利子ノ請求ト各自ニ起ルトキハ先ツ元金ニ對スル訴訟ノ完結スルマテ利子ニ付テノ辨論ヲ中止セサル可ラス何トナレハ元金ノ利息ニ於ケルハ因果ノ關係アルヲ以テ若シ果ナル利息ニ付先ニ裁判ヲ與フルトキハ後日ニ至リ元金ノ成立セサルコトノ裁判アルトキ忽チ不都合ヲ見ルコトアレハナリ

第百二十二條

又訴訟ノ進行中罰セラル可キ行爲ノ嫌疑アリテ其行爲カ訴訟ニ影響ヲ及ホス可キトキハ刑事手續ノ完結スルマテ之ヲ中止セサル可ラス

中止ノ終了スルニハ裁判ノ確定其他和解、抛棄及ヒ治罪手續ノ停止アルヲ要ス

中止ニ付テハ本法第百八十六條第百八十七條第百八十九條ヲ參看ス可キナリ

〔比較〕

本法第百二十一條ト本法第百九十五條第一トハ混同ス可ヲス第百二十一條ハ二箇ノ訴訟互ニ因果ノ關係アルモ其爭フ所ノ目的相異ナレリ反之第百九十五條ノ場合ハ同一物件ヲ爭エルモノナリ又第百二十一條ハ之ヲ中止スルモ第百九十五條ハ新ニ起ス訴訟ヲ却下スルノ結果ヲ生スヘキナリ

〔參照〕

獨　第百三十九條　訴訟ノ裁決ノ全部又ハ一部權利上關係ノ存否ニ依テ定マル場合ニ於テ其關係裁判關係トナリタル他ノ訴訟事件トナルトキ又ハ行政廳ノ確定スヘキモノ

ナルトキハ他ノ訴訟ノ完結又ハ行政廳ノ裁決ニ至ルマテ審問ヲ延期スヘキコトヲ命スルヲ得

同　第百四十條　裁判所ハ訴訟中罰セラルヘキ行爲ノ嫌忌アル場合ニ於テ其索知裁決ニ關係ヲ有スルトキハ刑事裁判手續ノ終結ニ至ルマテ審問ノ延期ヲ命スルコトヲ得

第百二十三條　裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ發シタル命ヲ取消スコトヲ得

第百二十四條　裁判所ハ閉チタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕

第百二十三條ハ訴訟ノ分合ニ付發シタル中止ノ命令ヲ取消スコトニ付示定シ第百二十四條ハ再ヒ審理ヲ開クコトニ付示定セリ

第百二十三條

訴訟ノ分合ニ付發スル命令ハ素ト訴訟整理上ノ性質ノモノナリ故ニ裁判所ハ其命令ヲ再ヒ取消シ得ヘキナリ

第百二十四條

裁判所ハ訴訟ニ付充分ニ辯論シ了レリト認ムル片ハ審理ヲ閉ツ然レ𪜈裁判ニ付會議スルニ當テ彼此ノ點ニ於テ未タ結了スルニ至ラサルヿヲ發見スル時ハ裁判所ハ既ニ閉チタル審理ヲ再ヒ開クヿヲ命令シ得而シテ再ヒ開クノ結果ハ即先キノ審理全部ニ亘リテ新タニ開キタルモノト看做スニ在ルナリ

〔參照〕

獨 第百四十一條 裁判所ハ分離連合又ハ延期ニ付キ發シタル命令ヲ更ニ取消スコトヲ得

同 第百四十二條 裁判所ハ終結セシ審問ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ立會ハシム但裁判所構成法第百十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

〔解義〕

本條ハ日本語ニ通セサル者アル片通事ヲ立會ハシムルコトニ付示定セリ

裁判所ニ於テハ一般ニ日本語ヲ用ユ可キコトハ裁判所構成法第百十五條ニ規定セリ而シテ辯論ニ參カル者若シ日本語ニ通セサルトキハ如何ス可キヤニ至テハ本條ノ決定スル所ナリ即チ此場合ニ於テハ通事ヲ立會ハシメサル可ラサルナリ

然レ𪜈本條ハ裁判所構成法第百十八條ニ定ムル場合ニ於テハ必ス通事ヲ立會ハシメサルモ可ナリトセリ即チ外國人當事者タル場合ニシテ其訴訟ニ關係ヲ有スル者及ヒ其訴訟ノ審問ニ參與スル裁判官或ル外國語ニ通スル片ハ其外國語ヲ以テ口頭審理ヲ爲スコトヲ得ヘキナリ

而シテ裁判所構成法第百十五條第二項ニ依レハ通事ノ任命使用幷ニ其職務ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ムトアリ故ニ此等ニ關スル規則ハ特別ニ定メラル可キナリ

本條ニ關スル裁判所構成法ノ條文ハ本法第百十條ノ解義中

ニ掲出セリ

第百二十六條　裁判所ハ辯論ニ與カル者聾又ハ啞ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會セシムルコトヲ得サル場合ニ限リ通事ヲ立會ハシムルコトヲ得

〔解義〕

本條ハ辯論ニ與カル者聾又ハ啞ナル片之ヲ如何スヘキヤニ付示定セリ

辨論ニ與カル者聾又ハ啞ニシテ尚ホ文字ヲ理會セサル片ハ通事ヲ立會ハシムルコトヲ得ヘシ

聾者又ハ啞者ト雖ト若シ文字ヲ理會スル片ハ文字ヲ以テ之ヲ審問セサル可ラス

又本條末尾ニ得ノ字ヲ加フルヲ以テ考フレハ通事ヲ用ユル

ト否ハ裁判所ノ權内ニ存スルカ如キモ若シ聾又ハ啞ニシテ文字ヲ理會セサル片ハ之レニテ審理ヲ止ム可キノ理ナキヲ以テ此場合ニ於テハ寧ロ前條ト均シク通事ヲ立會ハシムルノ義務アリト決スルヲ可トス

第百二十七條　裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ

本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス

〔解義〕

本條ハ發言ノ禁止及ヒ潛リ代人ヲ退斥スルコトニ付示定セリ

裁判所ハ陳述ヲ爲ス能力ヲ有セサル原被告、訴訟代理人、輔佐人ニ向後ノ陳述ヲ差止ムルコトヲ得ヘシ而シテ此差止ヲ爲スト同時ニ新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシムヘキコトヲ命スルモノトス若シ新期日ニ至リ辯護士ヲ出サヽルトキハ缺席ノ儘裁判セラルヽハノ不利益ヲ見ル可キナリ

又裁判所ハ訴訟代理ヲ常業トスル者訴訟代理人若クハ輔助人ト爲リ出廷セシトキハ之ヲ退斥セシムルコトヲ得ヘシ是レ潛リ代言人ノ增殖ト弊風ヲ防遏矯正スルニ最モ必要ナル法定ナリトス而シテ如此退斥セシメタルトキハ新期日ヲ定メ右退斥ノ決定ヲ原被告ニ送達セサル可ラス乃チ此カ送達ヲ爲シテ新期日マテニ原被告本人出廷スルカ辯護士ヲ差出スカ之ヲ撰擇セシメサル可ラス而シテ新期日ニ至リ辯護士又ハ自身出廷セサルトキハ亦缺席裁判ヲ免レサルモノトス

本條ノ規定ニ從ヒ裁判所カ爲シタル命令ニ對シテハ不服ヲ唱ヘ上訴ヲ爲スヲ得ス故ニ本條ノ命令ニ從ハサルトキハ徹底不利益ニ歸スルモノトス

辯護士ハ十分ノ能力ヲ備フルモノト見做ス可キヲ以テ其發言ヲ禁シ又之カ退斥ヲ命スルコト能ハサルナリ然レトモ裁判

所構成法第百十一條ニ定タル場合ハ此限ニアラストス(構成法第百十一條ノ正文ハ本法第百十條ノ解義中ニ掲載セリ)

〔參照〕

獨　第百四十三條　裁判所ハ適切ナル供述ヲナスノ能力ヲ有セサル原被告訴訟代人及附添人ニ其後ノ供述ヲナスコトヲ禁止スルヲ得

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ常職トスル訴訟代人及附添人ヲ退斥スルコトヲ得

此命令ニ對シテハ不服ヲ申立ルコトヲ許サス

代言人ニハ本條ノ規定ヲ適用セサルモノトス

第百二十八條　辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第百十條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス

前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルトキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

〔解義〕

本條ハ退斥セラレタルヨリ生スル結果ニ付示定セリ

辯論ニ與カル者不當ナル行狀ノ爲メ退廷ヲ命セラルヽトキハ恰モ任意ニ退廷シタルト同一ノ處分ヲ受ク即チ申立ニ依リ欽席判決ヲ言渡スモノトス本法第二百四十六條第二百五十條第二百五十二條乃至第二百五十四條ヲ參看ス可シ

辨論ニ與カル者トハ原被告若クハ訴訟代理人ハ勿論證人鑑定人ヲモ包含ス可シ乃チ證人ニシテ時刻前退廷セシメラルヽトキハ本法第二百九十四條ヲ又鑑定人ナルトキハ本法第三百二十八條ヲ適用ス可キナリ

然レトモ裁判所構成法第百十條ニ依リ審理ヲ中止スル場合ハ決シテ本條ノ取扱ヲ受クルヿナシ(構成法第百十條ノ正文ハ本法第百十條ノ解義中ニ掲載セリ)

又前條發言ヲ禁止サレタル者若クハ退斥セラレタル者再ヒ出廷スルトキニ於テモ前ト均シク任意ニ退去シタルノ取扱ヲ受クルモノトス

〔參照〕

獨　第百四十四條　審問ニ關係シタル者秩序ヲ維持スル爲メ審問ノ場合ヨリ退ケラレタルトキハ申立ニ依リ本人隨意ニ退出シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ニ對シ處分スルコトヲ得前條ノ場合ニ於テハ禁止又ハ退斥ヲ既ニ前審問ニ於テナセシトキニ限リ亦同一ナリトス

第百二十九條　口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一　辯論ノ場所、年月日

第二　判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三　訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四　出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若クハ被告

闕席シタルトキハ其闕席シタルコト

第五　公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

第百三十條　辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一　自白、認諾、抛棄及ヒ和解

第二　明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三　證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモノナルトキ又ハ以前ノ供述ニ異ナルトキニ限ル

第四　檢證ノ結果

第五　書面ニ作リ調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命令)

第六　裁判ノ言渡

附錄トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附錄トシテ表示シタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

〔字解〕

自白トハ自ラ進テ義務アルコトヲ陳述スルヲ云ヒ認諾トハ相手方ノ主張スル事實ニ同意スルヲ云フ

〔解義〕

本兩條ハ審問調書ニ關シ示定セリ即チ本條以下第百三十三條マテハ裁判所書記ノ職務中最モ必要ナル調書ノコトニ付

規定セルモノナリ

第百二十九條

本條ハ審問ノ法式ニ付テノ規則ニシテ本條列記スル所ノ條項ハ必ス調書ニ記載セサル可ラス

本法第四百三十六條法律ニ違背セルモノトシテ列記セル中第一規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セサリシトキ第五原被告カ法律ニ從ヒ代理セラレサリシトキ第六訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル云々トアリ而シテ本法第百三十四條ニ依ル片ハ方式ノ遵守ハ調書ノミヲ以テ之ヲ證スルヲ得トアルヲ以テ右裁判所ノ構成上ニ違法ナキヤ否正當ニ代理セラレタルヤ否又訴訟手續ハ公行セシヤ否ハ調書ヲ措テ他ニ之ヲ知ルノ道ナシ故ニ本條列記ノ條項ハ一々嚴明ニ之ヲ調書ニ記載セサル可ラサルモノトス

本條列記ノ條項ハ行文上明瞭ニシテ毫モ疑ノ生ス可キモノナシ

第百三十條

本條ハ辨論進行中ノ調書ニ關シ規定セリ即チ辨論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載シ又調書上特ニ明確ニス可キ條項ヲ掲載セリ

申立タル請求ノ全部又ハ一部ヲ完結ニ至ラシムル認諾、拋棄及和解ハ準備書面ニ掲クルト否トヲ問ハス法廷調書ニ於テ之ヲ確定セサル可ラス又裁判上ノ自認ハ容易ニ之ヲ取消ス能ハサルヲ以テ同シク調書ニ確定スルヲ必要トス

明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述トハ本法第二百二十三

條第三百八十條ニ定ムル如キ場合ヲ云フ

證人鑑定人ノ供述及ヒ檢證ノ結果ニ至テハ大ニ訴訟ノ消長ニ關係ス可キヲ以テ特ニ調書ニ確定スルコト必要ナリ

又書面ニ作リ調書ニ添附セサル裁判即チ訟廷ニ於テ口頭ヲ以テ直ニ言渡シタル裁判及ヒ裁判ヲ言渡シタルコトハ之ヲ明確ニセサル可ラス

準備書面ニ申立テサルコト及ヒ準備書面ト異ナル申立ニ付テハ調書ニ附錄トシテ添付ス可キ書面ヲ提出セサル可ラサルコトハ本法第二百二十二條ニ規定セリ若シ此等ノ書面ヲ提出シ而シテ該書面ハ附錄トスル旨ヲ該書ニ附記シアル片ハ調書ニ記入シタルト同一ノ効アルモノトス

訴訟記錄ハ法廷調書並ニ其附錄裁判所ヘ提出シタル準備書面ノ謄本及ヒ其附屬書類其他訴訟ニ關係スル裁判所ノ書類ヨリ成立ツモノトス

〔理由〕

抑法廷調書ヲ以テ確定スルモノハ判決中ノ事實關係ヲ正適ニ確定スルヿヲ保證スル目的ニ出ツルモノナリ則チ判決中事實書ニ於ケル事實關係ノ列擧ニ付對證ノ用ニ供スルモノナリ故ニ裁判官ハ調書ニ掲ケサルモノヲ判決中ノ事實トシテ掲クルヲ得サルナリ

〔辯義〕

辨論進行中ノ調書ニハ第百三十條ニ列記スル條項ノミヲ明確ニシ他ノ事項ハ之ヲ記載セスシテ可ナリヤ曰否ナ第百三十條第一項ニ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シトアリ故ニ訴

訟進行中ノ辨論モ其要領ヲ記載セシムルノ律意ナルハ明カナリ若シ然ラサルトキハ判決中ノ事實ヲ保證シ又ハ對證スルニ由ナク又該訴訟ノ上級裁判所ニ繫屬セシトキ上級裁判所ハ殆ント前審理ノ適否ヲ知了スル能ハサレハナリ而シテ第百三十條第二項ニ列記セル條項ニ至テハ特ニ明確ニス可キヨトヲ注意セシモノト解釋セサル可ラス

〔參照〕

獨　第百四十五條　裁判所ノ口頭上審問ニ付テハ筆記ヲ作ルヘキモノトス

其筆記ニハ左ノ件々ヲ記載スルモノトス

第一　審問ノ場所及日時

第二　裁判官及裁判所書記ノ氏名通事ヲ立會ハシメタルトキハ其氏名

第三　訴訟事件

第四　出廷シタル原被告及法律上代人訴訟代人及附添人ノ氏名

第五　審問ヲ公行シ又ハ公行セサリシコト

同　第百四十六條　審問ノ經過ハ單ニ之ヲ略記スヘキモノトス

左ノ件々ハ之ヲ筆記ニ載セテ確定スヘキモノトス

第一　申立テタル請求ノ全部又ハ一部ヲ完結ニ至ラシムル承認拋棄及和解

第二　規定上確定スヘキ申立及陳述

第三　證人及鑑定人ノ供述但其供述以前聽カレサリシ

トキ又其以前ノ供述ニ違フトキニ限ル

第四　檢證ノ結果

第五　裁判所ノ裁判(判決、決議及命令)但其裁判ヲ書面ニ作リ筆記ニ添ヘサルトキニ限ル

第六　裁判ノ言渡

筆記中ノ記載ハ附錄トシテ筆記ニ添ヘ其旨ヲ之ニ掲ケタル書面中ノ記載ト同一ナルモノト

第百三十一條　前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閲覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス

可シ

第百三十二條　調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺印ス區裁判所判事差支アルトキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

第百三十三條　受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第百三十四條　口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコトヲ得

第百三十五條　此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證書ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル可シ

〔解義〕

第百三十一條ハ調書ノ讀聞及ヒ閲覽ニ關シ第百三十二條ハ調書ノ署名ニ關シ第百三十三條ハ法廷外ノ調書ニ關シ第百三十四條ハ調書ノ立證能力ニ關シ第百三十五條ハ口頭ヲ以テノ訴又ハ申立等ニ關スル調書ノコトニ付示定セリ

第百三十一條

裁判所書記前條第一號乃至第四號ニ掲グル調書ヲ作リタル時ハ法廷ニ於テ直ニ關係人ニ讀聞ケ又關係人ヨリ閲覽ヲ求ムル時ハ之ヲ示サヽル可ラス而シテ調書ノ末尾ニ讀聞タルコト閲覽ノ爲メ示シタルコト又調書ノ如ク承認シタルコト若クハ承諾ヲ拒ミタルコトヲ附記セサル可ラス而シテ第百三十條第二項第五第六ハ之ヲ讀聞ケスシテ可ナリトス

若シ調書ニシテ本條ノ手續ヲ履行セサル時ハ第百三十四條ニ定ムル立證ノ効力ナキモノトス

第百三十二條

調書ニハ裁判長及裁判所書記署名捺印シテ其公正ヲ保證セサル可ラス

若シ裁判長差支アル時ハ其差支ノ旨ヲ記シ官等最モ高キ陪席判事代テ署名捺印ス又區裁判所ハ單獨判事ニシテ他ニ代ル可キノ人ナキヲ以テ若シ差支アル時ハ書記一人之ニ署名捺印スルヲ以テ足レリトス

第百三十三條

受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ書記ヲシテ立會ハシメ而シテ其調書ニハ前四條ノ規定ヲ適用スルモノトス

受命判事受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ審問スル場合ハ本法第二百九十六條第三百十八條第三百五十八條ニ規定セリ

第百三十四條

口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守セラレシヤ否ハ法廷調書ヲ以テソミ證スル者トス又法廷ノ調書ハ官吏ノ調製ニ係ルヲ以テ其證據力ニ至テモ他ノ公正證書ト同一ノ効力アルモノナリ故ニ僞造ノ證アラサルヨリハ之ヲ抗擊スル能ハサルモノトス

第百三十五條

此法律ニ於テ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲スコトヲ許セルトキ又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記之カ調書ヲ作ラサル可ラス

〔參照〕

獨　第百四十八條　筆記ハ第百四十六條第一ヨリ第四マテニ關スル場合ニ限リ關係者ニ之ヲ讀聞カセ又ハ通閲ノ爲メ之ヲ示スヘキモノトス其筆記ニハ其手續ヲナシ及承諾ヲ得又ハ如何ナル異議ヲ申立テタルヤヲ記スヘシ

同　第百四十九條　筆記ハ裁判長及裁判所書記之ニ署名スヘキモノトス

裁判長差支アルトキハ之ニ代リ年長ノ陪席裁判官署名スルモノトス區裁判官差支アル場合ニ於テハ裁判所書記ノ署名ヲ以テ足レリトス

同　第百五十條　口頭上審問ニ付キ定タル手續ノ遵守ハ單ニ筆記ヲ以テ之ヲ證明スルコトヲ得此手續ニ關スル筆記ノ主旨ニ對シテハ僞造ノ證明ニ限リ之ヲナスコトヲ許スモノトス

同　第百五十一條　法廷外ニ於テ區裁判官受命裁判官又ハ受託裁判官ノナス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシムベキモノトス

第二節　送達

第百三十六條　送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス

〔解義〕

本條ハ送達ニ關スル一般ノ原則即チ送達ヲ掌ル者及ヒ送達

ヲ爲スノ方法ヲ示定セリ

本法ニ於テハ送達ハ總テ裁判所書記ヲ經ルモノト決セリ即チ送達ハ裁判所書記ノ管掌ニ委セリ故ニ獨逸法ノ如ク一般訴訟人ヨリ直接ニ執行吏ニ委託スルノ制ト異ナル

送達ハ執行吏ヲシテ之ヲ爲サシムルヲ正則ト爲ス郵便ニ依テ送達スルヲ得ル塲合ハ本法第百四十三條ニ規定シアリテ之レ一ノ變則ニ過キス

本條ハ行文明瞭ニシテ此他特ニ解釋ヲ要セス

〔理由〕

送達ヲ裁判所書記ノ管掌ニ委シタルハ法律ニ通曉セサル輩ヲシテ裁判所ノ保護ヲ得セシメントスルニ在リ

〔參照〕

獨　第百五十二條　送達ハ裁判所使吏之ヲナスモノトス

代言訴訟ニ於テハ裁判所使吏ニ直接ニ委任スヘキモノトス其他ノ訴訟ニ於テハ原被告ノ撰定ニ依リ直接ニ其委任ヲナシ又ハ訴訟裁判所ノ裁判所書記ヲ經テ其委任ヲ爲スヘシ

同　第百五十三條　送達ヲナスノ權ヲ裁判所使吏ニ與ヘ及送達ヲ裁判所使吏ニ委任スルノ權ヲ裁判所書記ニ與ルニハ原被告ノ口頭上陳述ヲ以テ足レリトス

裁判所使吏送達ヲナシタルトキハ反對證ノ擧カルマテハ其送達ヲ原被告ノ委任ヲ受ケテナシタルモノト看做ス

同　第百五十四條　裁判所書記ヲ經テ送達ヲナスコトヲ許シタル塲合ニ限リ裁判所書記ハ必要ナル送達ヲ裁判所使

吏ニ委任スヘキモノトス但原被告自ラ裁判所使吏ニ委任セントスルコトヲ陳述スルトキハ此限ニアラス

第百三十七條　送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル

〔解義〕

本條ハ送達ス可キ書類及ヒ當事者若クハ代理人數人アルトキニ關シ示定セリ

送達ハ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルトキハ正本又ハ謄本ノ交付ヲ以テ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス

書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ場合ハ本法第百四十三條第百五十六條乃至第百五十八條第二百三十八條第二百三十九條第二百九十二條第三百二十二條第七百九十九條等ニ規定セリ

原告若クハ被告數人ニ對シ一人ノ代理者アルトキ又同一ノ原被告ニ對シ數人ノ代理人アルトキハ其中ノ一人ニ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ足レリトス

本條第二項ノ裏面ヨリ推考スルトキハ當事者數人アリテ各自代理人ヲ出スカ自身出廷スル場合ハ各自ニ書類ヲ交付セサ

ル可ラサルハ明カナリ

〔參照〕

獨　第百五十六條　送達ハ公製書ヲ送達スヘキトキハ其交付ヲ以テ之ヲナシ其他ノ場合ニ於テハ送達スヘキ書類ノ公證ヲ受ケタル謄本ノ交付ヲ以テ之ヲナスモノトス

其公製ハ裁判所使吏之ヲナシ代言人ノ擔當ヲ以テ送達スヘキ書類又ハ代言訴訟ニ於テ送達スヘキ書類ニアリテハ代言人之ヲナシ職權ヲ以テ送達スヘキ書類ニアリテハ裁判所書記之ヲナスモノトス

同　第百七十二條　關係者數名ノ代人又ハ代人數名ノ一名ニ送達ヲナスノ際書類ノ公製書又ハ謄本ヲ交付スルヲ要スルトキハ公製書又ハ謄本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足レ

リトス關係者數名ノ送達受領人一名ニハ關係者ノ員數ニ應スル公製書又ハ謄本ヲ交付スヘキモノトス

第百三十八條　訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第百三十九條　豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス